改訂 女子新國文 巻八

375.9
Ha7
資料室

42237
教科書文庫
4
810
42-1927
~~200000~~
2000044858

資料室

375.9
Ha7

昭和二年一月十二日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

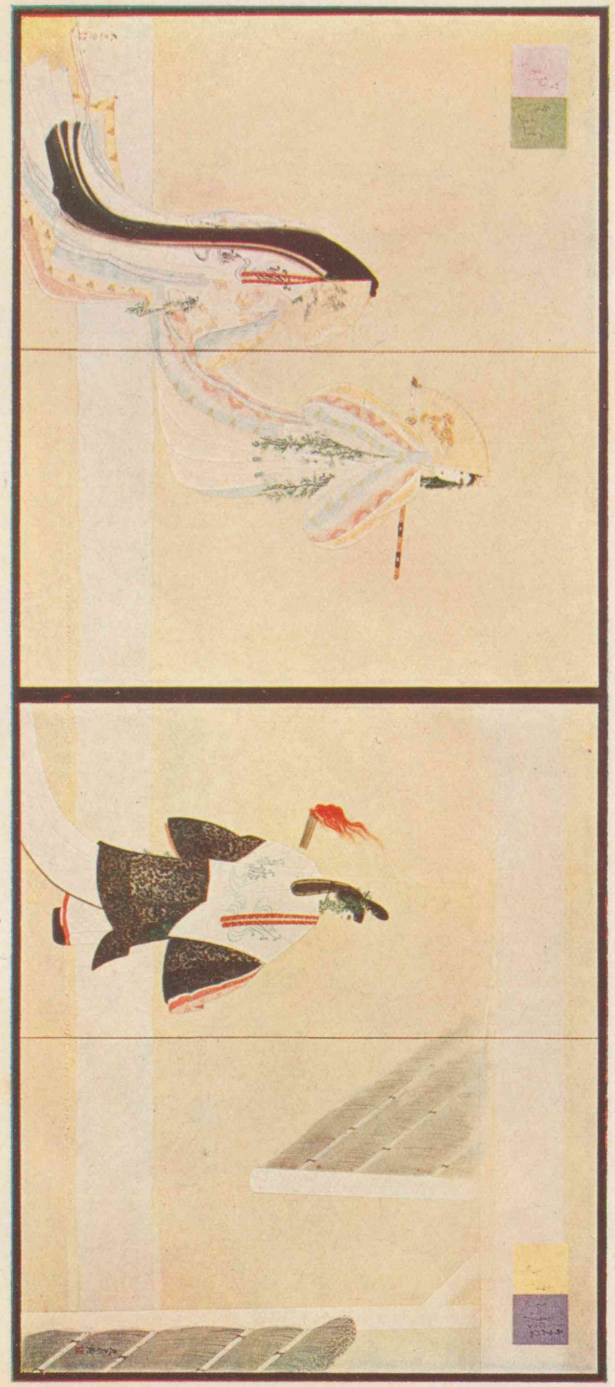
文學博士 芳賀矢一 編

改訂 女子新國文

八卷

東京
合資會社 冨山房 發行

鹿鹿



祭背大

筆泉天生獄　祭背大

廣島大學圖書館
廣島大學
44858

改訂 女子新國文 卷八 目次

一 三つの眺その一……一
二 三つの眺その二……五
三 幼時の追憶（自修文）……野口米次郎……七
四 銀の猫……上田秋成……一三
五 長谷寺詣……幸田露伴……二一
六 落花の雪……（太平記）……二六
七 人臣の道……北畠親房……三二
八 百蟲の譜……横井也有……三七
九 平安京……藤岡作太郎……四一
一〇 京の雨（自修文）……荻原井泉水……四六
一一 大嘗祭……五〇

一三 奥の細道その一……松尾芭蕉 五五
一三 奥の細道その二……松尾芭蕉 五九
一四 方丈の室……鴨長明 六四
一五 ワイマールより……藤代禎輔 六九
一六 ゲーテとその母(自修文)……島村民藏 七四
一七 啄木鳥を聽く日……吉田絃二郎 八二
一八 歳暮……鳥野幸次 八九
一九 今様三題……九四
萬劫年ふる……九四
松の木陰……九四
蓬萊山……九五
二〇 羽衣その一……(謠曲) 九五
二一 羽衣その二……(謠曲) 九七

二二 小謠……一〇一
二三 鶴の國……横山健堂 一〇三
二四 繪に魂を入るゝこと(自修文)……柳澤淇園 一一〇
二五 野村望東尼……佐々木信綱 一一四
二六 心の花(女の詠める歌)……一一八
二七 妹に諭す……吉田松陰 一二二
二八 主從の別……(義經記) 一二八
二九 文化生活の出發點……三宅雪嶺 一三三
三〇 精確な知識と數量的要素(自修文)……渡邊英一 一三八
三一 「途上所見」……尾崎紅葉 一四二
三二 蓑蟲と蜘蛛(自修文)……吉村冬彦 一四九
三三 曉の誕生……島崎藤村 一五九
三四 春と人……上田敏 一六一

三五　春をうたふ……山内一郎…二六八

東京帝大圖書之印

改訂

女子新國文　卷八

一　三つの眺　その一

煌々

群陰皆影を伏す

有象無象

皎潔

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照らす。月の光は温和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることもできないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴なはない清涼の光である。皎潔、無垢、崇美と稱ふべき優しい光である。休息、安静の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感

(一)賀茂眞淵の門人荷田蒼生子の歌。

嗟歎
感吟

古往今來

ずる。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の、人の胸懷に浸みわたることは、恰もその影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。(一)「うちむかふ月は一つの影ながらうかぶは千々の思なりけり。」である。

東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向かつて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟咏した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充ち滿ちて居る。天文學者はいふ、「月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。」と。この冷たい光が、古往今來どれほどの暖かみを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永久に人間の友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を

乾坤を一つにす

(一)新續古今集、僧仙覺の歌。

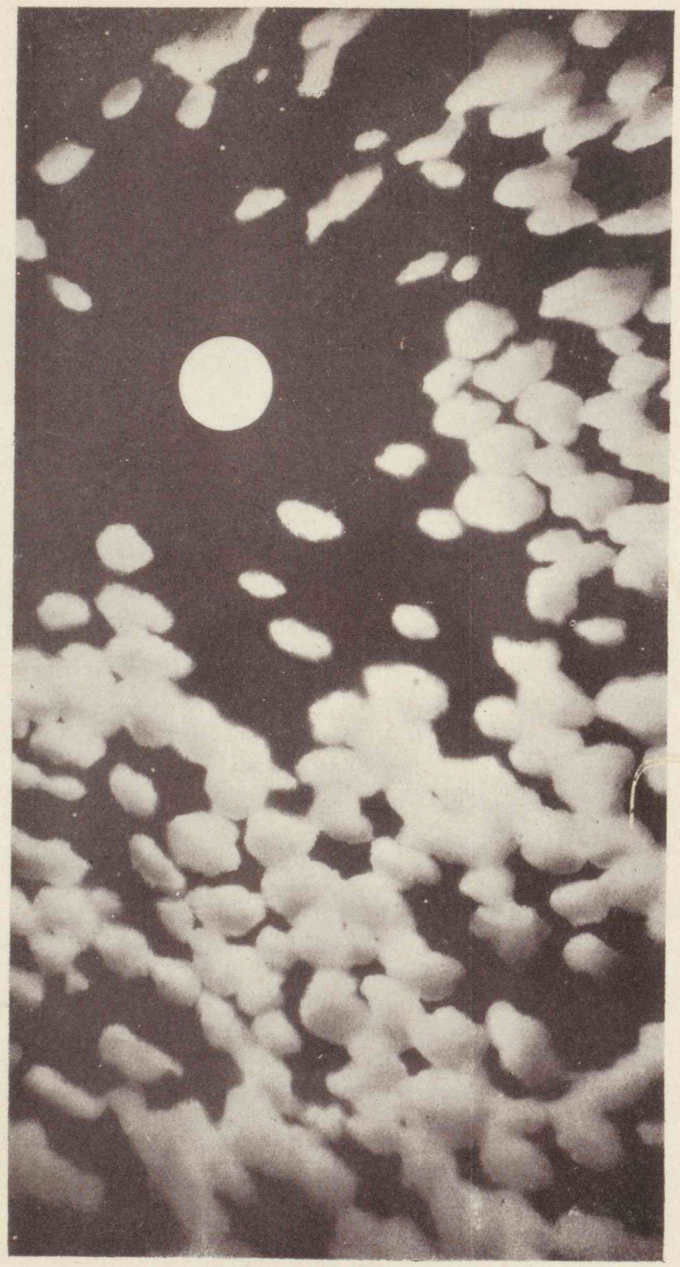
(二)唐の詩人白樂天の句。

廣寒宮

瓊玉を敷く

對照の妙
造化の巧

以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓、茅屋も皆同じ色に埋められる。(一)花ならば咲かぬ梢もまじらまし、なべて雪降るみ吉野の山。」といふやうに、眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。(二)「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層。」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちてくるこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、たゞ一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、瞬く中に瓊玉を敷く莊嚴な觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉いろいろな眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新綠の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を



月

長野草風筆

棺郭

盡したものではないか。一年中蓮の花の咲いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほど樂しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲きみだれるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへ有つて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限な詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月雪と同じやうに、一文錢を要せぬのもうれしい。人世に花なくんば、どれほど寂莫を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を愼んだのである。棺郭を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花

を忘れぬのである。月雪の眺はその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の語は、皆花に基づいたものである。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余はたゞ「花をし見れば(一)ものおもひもなし」といふ古歌を以て、すべてを總括し得べしと信ずる。

二　三つの眺　その二

月雪花三つの眺には、各その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことはできぬ。

やま櫻(二)花の下風吹きにけり
木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪にたとへたのである。

(一)「年ふれば齢は老いぬしかはあれど、花をし見れば物おもひもなし。」(古今集、藤原良房)

(二)新古今集、康資王の母の歌。

(一)古今集、清原深養父の歌。

(二)謠曲「葛城」の句。

寸紅

不夜城の觀

ふゆながら空より花の散りくるは
雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花にたとへたのである。

笠(二)は重し吳山の雪。鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とにたとへたのである。

花を賞して月を愛せぬ人はない。月、花を愛して雪を賞でぬ人もない。

思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に閉されてゐる極北の國では、氷は即ち人の家である。この地方の人には寸紅の目を樂しましめるものもない。またこれに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見たことがない。ガス、電燈の光に不夜城の觀を呈

(一)伊藤仁齋の歌。

(二)唐の劉廷芝が「代悲白頭翁」の詩中の句。

(三)愛知縣海東郡津島町。

淋漓　ぼたぼたとたれおちるさま。

して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見ることができない。我等日本人の、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は、古人の歷史が加つて一層の感興が增す。「世々(一)を經てながめし人の數にまた、我をもゆるせ秋の夜の月。」月は古來の歷史を照らす鏡である。「年年歲歲花相似(タリ)、歲歲年年人不ノ同(ジカラ)。」人生の感は花を見て益〻繁く、雪を見て愈〻多い。二千六百年來、月雪花三つの眺を有し得た我等祖先の遺蹟は、いかに多くの感興を我等に傳へたるよ。いかに多くの追慕を我等に催さしむるよ。

自修文

三　幼時の追憶

野口米次郎

私の少年時代の追憶は弘淨寺(三)の松の木で始る。……松は雪舟が墨色淋漓(リン リ)とゑがいた雄松(をまつ)のやうに、天へ昇らうとして地上と

雄渾の氣魄　勢のをゝしくよどみのない精神。
睥睨　にらむ。
最初のページを塞ぐ　思出の最初に出てくる。
瀟洒　さっぱりとあかぬけのしてゐること。
稜々　かどだつたさま。

の離別を惜しむ植物界の大蛇だ。弘淨寺は私の郷里にある淨土宗の寺である。詳しくいふと、郷里の家の二階に大きな丸窓があつて、外をのぞくと右手に見える寺である。しかし、私の追憶に問題となるのは、この寺の屋根ではない。この寺の墓場の隅に小さく埋つてゐる私の妹ではない。この寺の奥にある稲荷の社でもない。また庭の池へ水を飲みに出る狐でもない。幾百年たつても雄渾の氣魄を失はずに周圍を睥睨する松の木が、天氣の良い日には、はうき目綺麗に掃除された本堂前の廣場へ黑い影を投げるので、この寺が私の追憶の最初のページを塞ぐのである。この寺が、寧ろこの大きな松の木が、少年時代に於ける私の遊び友だちであつた。

私の少年時代の追憶には梅樹がない。櫻花がない。霧のやうに煙る晩春の柳がない。また瀟洒な立姿の水仙がない。私は少年の時この百年綠を變へない松から、横擴りに下へ向かつて稜々たる氣骨の幹や枝を無遠慮に伸す松から、一言で蔽ふと、大地の生氣が一本の樹木と化したと思はれる松の木から、いはゆる男性美の影響を受けたことを喜ぶものである。私はこの弘淨寺の松の木を遊び友だちとしたといつたが、實際には私はその木を恐れたのである。一種の恐怖心を以てその木に接したのである。松には雲雨を得て天に昇る大蛇のやうな龜裂の入つた甲らの皮膚がある。松には觸れると手を刺す針のやうな葉がある。が、松には人に婉麗の感をそゝる何物もない。弘淨寺の松の木に關する私の追憶は、群青金泥の酒井抱一の松ではなくて、毅然として百難に堪へる雄姿が紙上で風雨を呼ぶ雪舟探幽の松である。私に語らねばならない追憶がある。

煮えくり返るやうに熱い夏の日が續く。田地田畑に稻や麥が唇を潤ほし根を濕すに足りる一滴の水もない。地面は割れ始め、樹木は萎れかける。日中は蟬が雨か霰のやうに雨乞の歌を地上

龜裂　さけめ。
婉麗　うつくしくうるはしいこと。
(一)畫僧。名は忠因。姫路の人。文政十一年(一八二八年)歿。年六十八。
(二)畫僧。名は等楊。備中赤濱の人。寛正中明國に渡り、歸朝後周防山口の雲谷寺に住んだ。山水人物の畫に長じてゐた。永正三年(一五〇六年)歿。年八十六。
(三)狩野探幽。有名な畫家。白蓮子とも稱した。山水人物草花禽獸蟲魚悉く長じてゐた。延寶二年(一六七四年)歿。年七十三。

(一)津島神社。祭神の牛頭天王は欽明天皇の元年に西海の對馬からこの地に遷され、よつて地名を津島といふと。
(二)氷室氏。
沛然　雨の盛にふるさま。
答へられたしるしがあつた。　天を空しうして　天がからになるほどに。
篠突く雨　つよくしげくふる雨。
傲然　おごりたかぶるさま。

に降らす。夜分になると、家の前を、雨乞の百姓が鐘や太鼓をたゝいて、牛頭天王の御社へと急ぐ。もの凄いほど眞暗な御社には、雨乞の百姓を迎へる爲に提燈が點り、かゞり火が焚いてある。御社の神主の家の座敷に、昔から靈驗あらたかといはれてゐる探幽の瀑布の畫が出されてから、もう十日以上になる。……沛然たる雨を呼ぶはずの「探幽の瀑布」は、魔力を失つたのであらう。ところが十五日の滿願の朝早くから、無言の祈禱を歌つてゐる巨人がある。……他ではない、弘淨寺の松の木である。間もなく天は曇り始め、力强い風が吹きだす。……否、それは雨を祈る松の木が吐出す龍のうなり聲であらう。松の木の祈禱は答へられた。恐しく大粒の雨が落ち始め、半時間もたゝない中に、天を空しうして降る豪雨となつた。人間の歡喜以上に喜ぶのは弘淨寺の松の木である。誰か私の外に、篠突く雨を全身に浴びつゝ、傲然として立つこの松の偉觀壯觀を見たものがあらう。この松の木の態度は、百倍

大鵬　おほとり。
嬌態を作る　なまめいたさまをする。
顧眄する　ふりかへつてみる。
霰雳　雲のたなびきわたるさま。
催眠歌　ねむらせる爲にうたふ歌。ねんねこうた。
傳統的　古くから代々傳はつて。

の勇氣を振ひ起して三軍を叱咤する暴將軍のそれであつた。

私には弘淨寺の松を單に樹木とは思へなかつた。……雨を拂ふ春風に乘つて、一つの白い蝶々がこの松にとまつた時、私はその温顏に平和の微笑があることを知つた。群禽を眼下に睥睨して擴げた大鵬の羽が、急に嬌態を作つて顧眄する美人の扇面と變つたと思つた。私は霰雳たる霞の春の日に、この松が奏でる午後の催眠歌を聞いた。そして、この松が雪の朝にぽつてりと大きな綿帽子を被り、その綿帽子が太陽の光線を受けて、金剛石のやうな光を放つた時の光景はどうだ。私の家は傳統的に熱烈な佛教信者であつて、私は朝念佛を聞いて起き、夜念佛を聞いて床に就いた。毎朝早く鐘の聲が弘淨寺から響いた時、私は私が尊敬するあの松の木の音であるやうに感ぜざるを得なかつた。夕景になつて木魚の音が聞えて來た時、私は私の畏敬するあの松の木の聲であるやうに感ぜざるを得なかつた。私は夕景の木魚を聞

彗星　はうきぼし。

三更　よなか。夜の十二時から午前二時までをいふ。

妖魔　ばけもの。

くと、家の二階の丸窓をぱつたり締めて、この松を見ることを恐れた。……夜陰の空に立つその姿は、實に恐しいものであつた。私は夜になると天狗の寢床になるであらうとさへ想像した。また私は母から、死んだ妹の杓子のやうな人魂が、この松の間へ落ちたといふことも聞いた。

弘淨寺の松の木に關して私の忘れることのできない追憶がもう一つある。私の追憶は九尺以上もあつたと思はれる彗星に關係してゐる。世界が終局に近づく印として彗星が現れるのだと聞いた時、どんなに私の小さい胸は戰いたであらう。夜も三更に近い時、母は眠つてゐる私をゆり起して二階へ連出し、例の丸窓をあけて、弘淨寺の松の木を見よと語つた。私は恐る恐る青臭い呼氣を吐く老龍の松を見た。……老龍の角とも思はれる邊に、妖魔の彗星が引懸つて居つた。私は、寧ろ私の心眼は、彗星の光に照らされて、松葉の針がぎらぎら光つて居つたやうに感じた。私

(一)野口米次郎著。大正十四年東京第一書房發行。

御前追ふ

返りまをし

忌垣

はどうしてこのもの凄い深夜の光景を忘れることができよう。……それを思ふと、私は今も身ぶるひをして、その夜の恐怖に擊たれるのである。

――松の木の日本――(一)

四　銀の猫

上田秋成

文治それの年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例のことにて、御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後べ仕うまつれる、渚に遊ぶ葦田鶴の歩みして、疾からず、遲からず、列を亂さず練出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、畏み奉る人數多あるに、警衛して「あな」とだにいはせず、世にいかめしく尊き御有樣なり。返りまをしして、御手輿に召させ給ふほど見留めさせ給ひ、御階の忌垣のもとに畏まり居る法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑて、いと痩黑みづきたるに、衣、杖、笠なども乞食者のさましたる、

なほ人
雲水
おほとなぶら
簀子
藐姑射の山

なほ人ならずや思しけん、「あの法師が修行するやう、名をも問へ。」と仰せ給ふ。御輿添の若侍急ぎ走り寄りて、「有難く御目給へり。何處よりの修行ぞ、名をも申せ。」といふ。ゆくりなきに驚きたるさまして、「雲水に在處定めずはべるものにて、名は圓位と申す。」といふ。聞し召されて、「さればこそ聞知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たる例に誘ひ歸らん。わが後につきて來れといへ。」とて、召連れさせ給へり。

上田秋成

御舘に入らせ御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶら數多照らしかゝげたり。けふの道行づとゐてこ。」と仰せ給ふ。「法師まゐれ。」とて、御座近き簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、「昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黑

月花の譽

くやつしたれど、月花の譽はものの心なきあづま人さへ聞知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には、玉とて拾ひ收めたらんを、語りて聞かせよ。」と仰せ給ふ。

「いとも輝かしきにぞ。たゞ夢路をたどるやうにはべりて、聞え奉るべきこともはべらず。さとき御眼に見顯されてはべるこそいとも有難けれ。(一)伊勢の海千尋の濱におり立ちならひはべれど、かひあることもうち出ではべらぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねて學ばせ給ふとも漏りきゝ奉る。天の下まつりごち給ふ御器物の大いなるに思し寄らせ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思し知りはべる。大空に羽うちつけて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべきあな畏し。」と申す。

うち笑ませ給ひ、「弓取りし人のもとの心の猛きには、詠む歌も直く明らさまにと聞くは實か。歌は武士の荒々しき心には詠み得ま

(一)「伊勢の海の千尋のはまにひろふとも、今は何てふかひかあるべき。」(後撰集、敦忠朝臣)

じきものに、宮人たちはさたし給へりとや。軍に出立ちて、笛、鼓の音、馬のいなゝきはものとも思はぬを、この三十文字餘りの學には心の後るゝはいかに。「こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、御弓矢取らして御軍に立たせ給ひし。その御歌を讀み見奉れば、猛く直々し、調もいと高しとこそ聞きわたりはべれ。いでや歌詠まんとては、ますらを心をとり隱し、あてになよびかにのみ詠みいでまくすること、さとく猛き御心のまゝにうちまねばせ給はんには、今の世の人誰かは並びあひ奉らん。三尺の劔を取りて「大風起り雲飛揚す。」と歌ひ、槊を横たへて「烏鵲南に。」と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじく磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづれの道、いづれの業にも、初より優れた

あてなよびか

(一)漢の高祖の作。「大風起兮雲飛揚。威加二海内一兮歸二故郷一。安得二猛士一兮守二四方一。」

(二)魏の曹操の作。

らんは鬼にこそはべらめ。」といふ。

「人々あれ聞き給へ。世は捨て遁るとも、たのもしき人の心ならずや。圓位よ。圓位よ。汝が遠つ祖の秀郷(一)といひしは、世にいみじき弓の上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬることは忘れずてぞあらん。事一言にても教へ承らばや。」「こは益、恐ある御問はせなり。御物語のはてばては、武士の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山を住所の痩法師にだに問はせ給ふことの忝さよ。向かひ奉りてはをこがましく、何をかは家の傳はりなどとて聞え奉るべき。まして有難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈みをさへあだなるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を出でたるいたづらものの、弦ひかんすべだに心にも留めはべらず。たゞ一言の忘れ難きは、賞を重くし罰を輕くせよといひしと、任ずるものを辱しむれば危しといひしことのみ。病める士卒の疽をすひ

(一)藤原秀郷。田原藤太といふ。鎮守府將軍となつた。

まらうど

しは、人の心をよく買ひなすと雖も、眞の情よりとも覺えはべらず。かまどを減じて人を危きに陷るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべき君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へることの怪しきまで賢くおはするを、餘所ながら聞きはべるには、この方の御問、免させ給へ。」とて、額を板敷に擦りつけて申す。

君笑みほこらせ給ひ、「口とく、心賢しき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。人々と土器取りはやし、曉かけて遊ばん。まらうどは酒飲まざるべし。鹿、猿の中に立交りて歌詠めといふとも、詠むまじ。たゞわが前にて遊べ。飽かず飲み、ものきたなげに食散らす人々は暖かにこそ。風冷やかなるに、この火取りて法師に參らせよ。」とて、白銀をもて作れる猫の形したるを取傳へて、「君より賜はす。」とて、前に置きたり。「鹿、猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ痩法師が爲には、げに似つかはしき御賜ぞ。」とて、三度押戴きて、翌朝御暇賜はりて立出づるに、御館

こゝろなき
身にもあは
れはしられ
けりしきた
つさはの秋
の夕くれ

青侍

の人やどりに誰人の童ならん、括袴の裾朝露にぬれそぼちて、いと寒げに居るを見て、「これ取らせん。火埋みして手足を暖めよ。」とて、かの銀のきらきらしきものを與へて、顧もせで立去りぬ。

童うち驚きて、「これ見給へ。見も知らぬ法師の、見も知らぬもの賜ひつるは。」とて青侍に見すれば、目口をはだけ、「かく尊き寶物を誰かは得させん。拾ひやしつる。」といふ。

「さらに。さらに。道のそらにかゝるものやはあるべき。あな恐し。殿に奉りて給へ。」といふ。やがて御館にもて參り、仕ふる君を呼びいでて、

猫　（菊池容齋筆）

しかじかのことなんと申す。「いと怪し。大將殿の法師に賜ひしを、いかで童には得させけん、いぶかし。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君うち笑み給ひ、「かの似而非法師、あなづらはしく幼げなるものくれしとて、腹立たしくや思ひけん、わが門の前に棄てゆきつるよ。一度似而非者の手に穢れしもの、その童に取らせよ。」とて、取りおろさせ給ひぬ。

西行後にこのことを人に語りていふ、「右幕下は誠にねぢけたる君なり。口に蜜あれど、心には針のおはすらん。漢高の大度、曹孟德の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふことを生まれ得給ひけん。たゞ悲しむべきは、神の御齋の、この後やうやう衰へさせ給はん世の姿なるは。」とて、涙とゞめ難くしてもの語りしとなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずとも、うちひそみぬべし。

—藤夏冊子—

（訳）あなづらはし

廣島縣農工銀行

入相の鐘

（一）奈良縣磯城郡初瀬町。今は眞言宗豐山派の總本山。

（二）法華經普門品第二十五卷は觀音經である。

隨喜

五　長谷寺詣

幸田露伴

弓張月のやうやう光りて、入相の鐘の音も収る頃、西行は長谷寺（一）に着きけるが、問ひ驚かすべき法の友のなきにはあらねど、問ひも寄らで、觀音堂に參り上りぬ。さなきだに梢透きたる樹々をなぶりて夜の嵐の誘へば、はらはらと散る紅葉なんどの空に狂ひて吹入れられつ、法衣の袖にかゝるもあはれに、また佛前の御燈明の瞬きしつゝ、萬づのものの黑みわたれるが中に、いと幽かなる光を放つも趣あり。法華經の品第二十五（二）を聲低う誦するに、なにとなく平時よりは心も締りて、身に浸みわたる思のすれば、なほ誠を籠めて誦して行くに、天も靜けく地も靜けく、人も全く靜まりたる、時といひ、所といひ相應して、わが耳に入るはわが聲ながら、若しくは隨喜佛法の鬼神などの、聲を和せて共に誦するかと疑はるゝまで、上なく

殊勝に聞えわたりぬ。特に參りたるかひはありけり。菩薩も定めしかゝるをりのかゝる所作をば善しとして、必ず納受し給ふなるべし。今宵の心の澄みきりたる、この清しさを何に比べん。餘りに有難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがらこの御堂の片隅になり趺坐して、曉方になほ一度誦經し參らせて、さてその後香華をも淨水をも供して罷らん。」と、西行やがて三拜して、御佛の御前を少し退り、影暗き一隅に身をねぢ据ゑ、凍れる水か、枯れし木の、動きもせねば、音も立てず、寂然として坐しゐたり。

趺坐

長谷寺全景

夜は沈々と漸く更けて、風も眠れる如くになりぬ。右左に並びて立ちたりける御燈明は、一つ消え、また一つ消えぬ。今はたゞいと高き吊燈籠の光朦朧として力なきが、夢の如くに殘れるのみ。この寺の僧どもは寒氣に怯ぢて、所化寮に爐をや圍みてあるらん、影だに終に見するものなし。いふべき方もなく靜かなれば、日比燒きたる餘氣なるべし、今薫ゆるとにはあらぬ香の、あるかなきかに自ら匂を流すも、いとよく知らるゝかゝるをりから、何者にか此方を指してくる足音す。御佛に仕ふるこの寺のものの、燈燭をつぎ參らせんとて來つるにやとうち見るに、御堂の外は月の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へでや、頭には何やらんうち被きたれど、正しく僧形したるが歩み寄るさまなり。心を留むとにはあらざれど、何としもなくなほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇の方へ身を入れたれば、定かには知れぬながら、この御堂にうち向かひて、一度はまづ拜み奉り、さて靜々と上り來りぬ。御堂は狹からぬに、燈は螢ほどなり。燈の高さは高し。互のほどは隔りたり。此方を

所化

僧形

菩提の道の友

淺ま

卒爾

萬籟

彼方はありとも知らず、彼方を此方はよくも見得ねば、西行はたゞ我と同じき心の人もまたありけるよと思ふのみにて、うち過ぎたり。彼方はもとより闇の中に人あることを知らざれば、何に心を置くべくもなく、御佛の前に進み出でつゝいとつゝましげに畏まりて、數多たび合掌禮拜し、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の道の友なり。その心操の淺まならぬも、夜深の參詣に測り得たり。衣の色さへ辨ち得ざれば、面はまして見るべくはなけれど、淨土の同行の人なるものを、呼掛けて語らばや、名をも問はばやと、西行は胸に思ひけるが、卒爾にものいはんは惡しかるべし。祈願の終つて後にこそと、心を控へて窺ふに、彼方は珠數を取出し、さやさやとばかりすり始めたり。針の落つる音も聞くべきまでもの靜かなる夜の御堂の眞中に在りて、水精の珠數を擦る音の亮らかなる響、いとさえて神々し。御經は心に誦すと思しく、萬籟絶えたるに、珠の音のみをたゞ緩

萬法

やかに響かす。その音、或は明らかに、或は幽かに、或は高く、或は低く、寢覺の枕の半ばは夢に霰の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面に菡萏の急に開くを聞くが如く、小川の水の獨り咽せぶか、雨の紫竹の友ずれか、山吹匂ふ山川の蛙鳴くかと過たれて、一聲聲中に萬法あり、皆實相と相違背せずと、いとをかくしくも聞きなされば、西行感に入つてありけるが、期したるほどのことはしはてしにや、その八珠數を收めて、御佛をば禮拜すること數多たびしつ、やをら身を起して罷らんとす。菩提の善友、淨土の同行、契をこの上に結ばんには、今こそ言葉をかくべけれと

長谷寺廻廊

しどろもどろ

(一)「またや見ん交野のみ野のさくら狩、花の雪ちる春の曙」（新古今集、藤原俊成）

(二)河内國北河内郡。

(三)「朝まだき嵐の山のさむければ、紅葉の錦きぬ人ぞなき」（拾遺集、藤原公任）

と、歌の調は好かれ、悪しかれ、西行俄に詠みかくれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひかけぬに驚きしが、「なんと仰せられしぞ。今一度。」と、心を押鎮めて問ひかへす。聞きとりかねけんとすゐするまゝ、「思ひ入りて擦る珠數の音の聲澄みて。」と再びいへば、後はいはせず、「君にておはせしよ。こはいかに。」と涙にふるふおろおろ聲、言葉のあやもしどろもどろに、身を投伏して取附きたるは、聲音に紛ふ方もなきその昔のわが妻にぞありける。

—二日物語—

六　落花の雪

(一)落花の雪に踏迷ふ、(二)交野の春の櫻狩、(三)紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも、旅寢となればもの憂きに、恩愛

(一)近江國滋賀郡にある。

(二)「貫物たえずそなふる東路の、勢多の長橋の音もとゞろに」（風雅集、平兼盛）

(三)「近江より朝たちくれば、田ねの野に、鶴ぞなくなる明けぬこの夜は」（古今集、大歌所の歌）

(四)「白露も時雨もいたく守山は、下葉のこらず色づきにけり」（古今集、紀貫之）

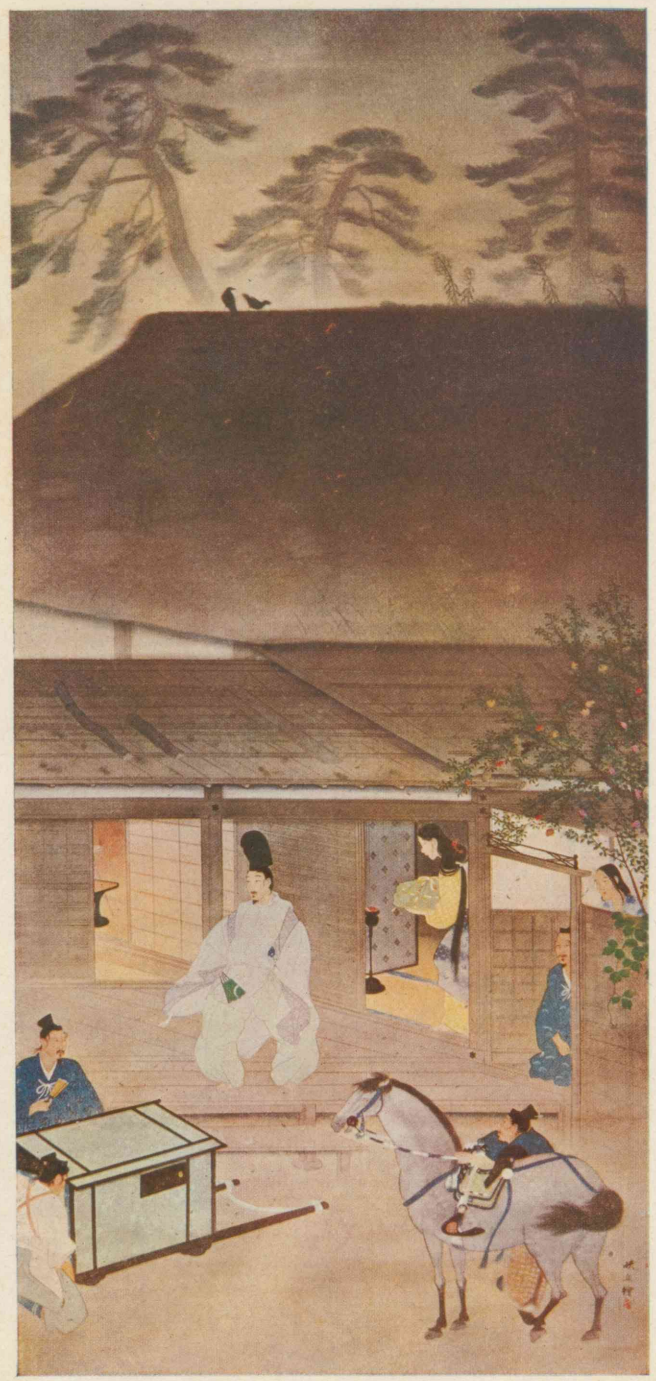
(五)「人住まぬ不破の關屋の板庇、荒れにし後はたゞ秋の風」（新古今集、藤原良經）

(六)「うちわたす今や汐干になるみ潟、とをよる舟の聲も通はす」（天木集、常磐井入道）

の契淺からぬ、わが故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧て、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれなる。

憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見わたせば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟のうき沈み、駒もとゞろと踏鳴らす、勢多の長橋うち渡り、行交ふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかとあはれなり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠わくる道を過行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。ものを思へば夜の間にも、老その森の下草に、駒を止めて顧る、故郷を雲や隔つらん。

番場、醒が井、柏原、不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋の雨の、いつかわが身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜み、汐干に今



池田の宿　松岡映丘筆

捨小舟

(一)遠江國天龍川の東岸にあゝ。古は西岸にあつた。

(二)安德天皇の御代。

(三)平清盛の子。(壽永三年一一八四)の谷の戰に源義經に捕へられて鎌倉に送られた。

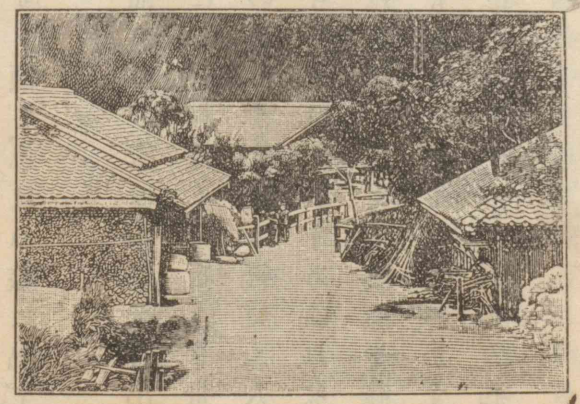
いばゆ

(四)こゆべしとおもひきや、命なりけり小夜の中山。(新古今集、西行法師)

や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

元暦元年の頃かとよ、重衡の中將の東夷の爲に捕はれて、この宿にやどり給ひにし、その古のあはれまでも、思ひ殘さぬ涙なり。

旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲道を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家鄕の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつゝ、二たび越え



池田

亭午（轅）

(一)遠江國榛原郡。
(二)仲恭天皇の承久三年。
(三)山城國葛野郡嵯峨にある今の天龍寺。

し跡までも、羨ましくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日すでに亭午にのぼれば、かれひまゐらするほどとて、輿を庭前にかき止む。ながえをたゝきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて殺されし時、

昔南陽縣、菊水。
今東海道、菊川。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとどまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきくがはの
おなじながれに身をや沈めん

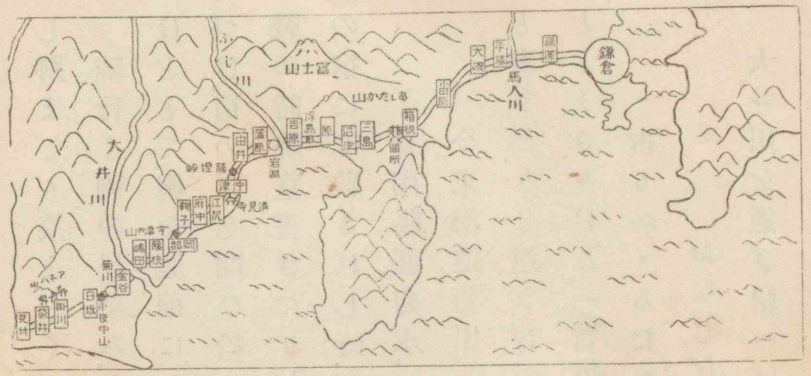
大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、亀山殿の行幸の、嵐

汲下流而延齢。
宿西岸而終命。

龍頭鷁首

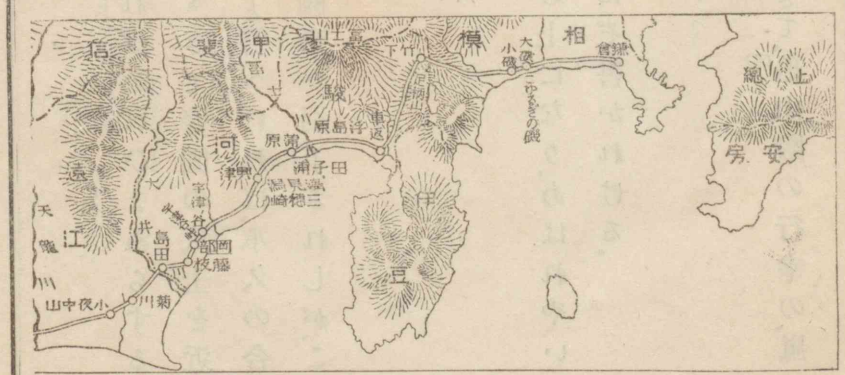
(一)(二)共に駿河國志太郡。

(三)「歸りくるほどはなけれど朝露の岡邊の眞葛うら枯れにけり。」（藤原爲家）



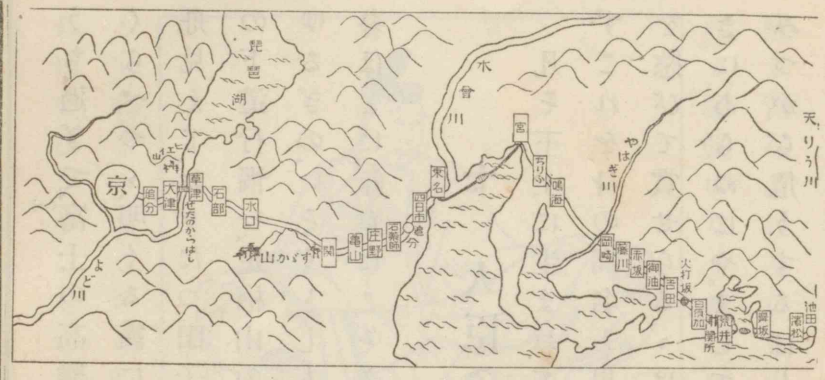
の山の花盛、龍頭鷁首の舟に乘り、詩歌管絃の宴にはべりしことも、今はふたたび見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつゞけ給ふ。

島田、藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れて、もの悲しき夕暮に、宇都の山べを越えゆけば、つた、楓いと茂りて道



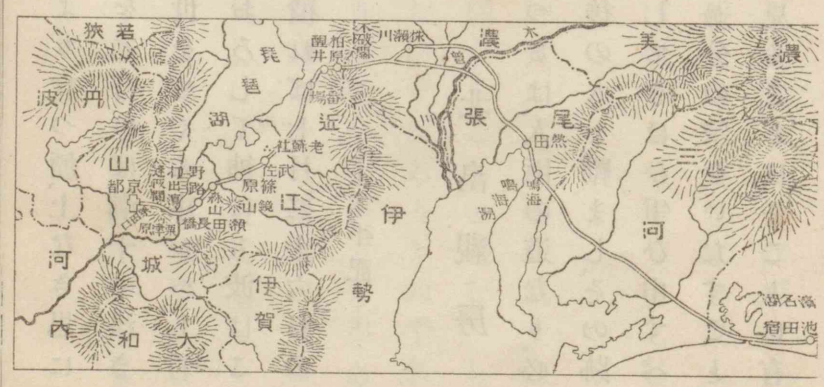
(一)「駿河なる宇津の山べのうつゝにも、夢にも人にあはぬなりけり。」（伊勢物語）

(二)「駒とめて過ぎぞやられぬ清見潟、ちりしく花や波の關守。」（風雅集、法橋顯昭）



もなし。昔業平の中將の、すみ所を求むとて、東の方へ下るとて、「夢にも人にあはぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津、蒲原



うち過ぎて、(一)富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、潮干や淺き舟見えて、おりたつ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道行悩む、足柄山の峠より、大磯、小磯見おろして、袖にも波はこ(二)ゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

——太平記——

(一)「富士の嶺の煙はなほぞ立ちのぼる、上なきものはおもひなりけり。」（新古今集、藤原家隆）

(二)「こゆるぎのいそたちならし磯菜つむ、めざしぬらすな沖に居れ波。」（古今集、相模歌）

(三)後醍醐天皇の元弘元年。

七　人臣の道

北畠親房

凡そ王土に生まれて忠をいたし命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべからず。されど後の人を勵まし、その跡を愍びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、みづから危うするはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに有

きほひ爭ふ

前車の轍

難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪强なるをば戒められき。豪强になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。

北畠親房

鳥羽院の御代にや、「諸國の武士の源平の家に屬することを停むべし。」といふ制符たびたびありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徵し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるゝやから多くなれば、いひがひなきことになりにけり。

制符

語らはる

言語は君子の樞機

堅き氷は霜を履むより至る

亂臣賊子

(一)堯の時の隱士。

(二)支那上古の君。

(三)堯の時の隱士。

五臟六腑

この頃の諺には、一たび軍にかけ合ひ、或は家の子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば「わが功におきては日本國を賜へ。」若しは、「半國を賜はるとも足るべからず。」などぞ申すめる。誠にさまで思ふことにはあらじなれど、やがてこれより亂るゝはしともなり、また朝威の輕々しさも推しはからるゝものなり。「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心詞を愼まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色のあらたまるにもあらず、人の心の惡しくなりゆくを末世とはいへるにや。昔許(一)由といふ人は、帝堯(二)の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父(三)これを聞きて、この水をだにきたながりて、渡らざりき。その人の五臟六腑のかはるにはあらじ。よく思ひならはせる故にこ

萬姓の主

そあらめ。

なほ行末の人の心想ひやるこそあさましけれ。大かたおのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を殘すべきことをばなどか顧ざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に頒たせ給はんことは、推してもはかり奉るべし。若し一國づつを望まば、六十六人にて皆ふさがりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悅ぶとも、千萬の人は悅ばじ。いはんや日本の半ばを心ざし、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して言葉にも出で、面

巢父汚流に飲はず（中村不折筆）

にも耻づる色のなきを、謀叛のはじめといふべきなり。昔の將門の比叡山に登りて大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにやありけん。昔は人の心正しくして、自ら將門に見も懲り聞きも懲りはべりけんを、今は人々の心かくのみなりにたれば、この世は愈〻衰へたるにや。

漢の高祖(一)の天下をとりしは、蕭何、張良、韓信が力なり。こを三傑といふ。萬人にすぐれたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、「籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するはこの人なり。」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて少しきなる所を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど張良は身を全くしたりき。近き世のことぞかし、頼朝の時までも、文治(二)の頃にや、奥の泰衡(三)を追討ちしに、みづから向かふことありしに、平重忠(四)が先陣にてその功すぐれたりければ、五十四郡(五)の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、きはめたる少き所を望みて賜はりけりとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめん爲にや、賢かりけるをのこにこそ。

(一)漢帝の第一代。姓は劉。名は邦。
(二)後鳥羽天皇の文治五年（一八四九年）。
(三)藤原泰衡。
(四)畠山重忠。
(五)昔は奥州五十四郡。
籌を帷幄の中にめぐらす

八　百蟲譜

—神皇正統記—

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、優しきものの限りなるべし。それも、啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ、なほめでたけれ。さてこそ莊周(一)が夢も、このものには託しけめ。

蛙は古今の序(二)に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。おぼろ月夜の風靜まりて、遠く聞ゆるはよし。古池(三)に飛んで翁の目覺したれば、このものの事、更にも謗り難し。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞る心地す。されば、初蝶とも、初蛙ともい

(一)莊子に「昔者莊周夢爲二胡蝶一云々。」とある。
(二)古今集序「花になく鶯水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける云々。」
(三)「古池やかはづとびこむ水の音。」（芭蕉）

ふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ、大きなる手がらなれ。(一)「やがて死ぬ氣色は見えず。」と、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

螢はたぐふものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はたゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに(二)貧の學者にとられて油火の代りにせられたるは、このものの本意には非ざるべし。歌に螢火と詠ませざるは、殊の外の不自由なり、俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならん。つくつくぼふしといふ蟬は、つくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。」と世の諺にいへりけり。あはれは蜀魄の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰が爲に身を焦すにか。

(一)「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲。」(芭蕉)

(二)晋の車胤。

蜉蝣ははかなきためしに引かれ、たゞ食ふ蟲はもの好の謗となれり。

同じ寶の名によばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し。

蝸牛はたゞ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、行く先々を負ひ歩くは、雲水の安きにも似ず。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原、吉原を、駕籠に乘りて富士を眺め行く人には似たり。

機織、鈴蟲、くつわ蟲は、その音の似たるをもて名に呼べり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一つ在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

きりぎりすのつゞりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、(三)藻にすむ蟲

(一)原は駿河國駿東郡。吉原は同富士郡。共に昔の五十三驛の一。

(二)「秋風に綻びぬらし藤袴、つゞりさせてふきりぎりすなく。」(古今集、在原棟梁)

(三)「あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと、音をこそ鳴かめ世をば怨みじ。」(古今集、藤原直子)

(蟲蟲)

(一)晉の嵇康の交つた奇士。阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎、いはゆる竹林の七賢である。

竹林の七賢（狩野元信筆）

はわれからと、たゞ身の上を歎くらんを、養蟲のちゝよと呼ぶは、いと優しげなり。されど、父のみこひて、などかは母を慕はざるらん。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕べ、始めてほのかに聞きたらん、または長月の頃力なく殘りたるは、寂しき方もあり。蚊屋つりたる家のさま、蚊やりたく里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢(一)の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。

—鶉衣—

(一)Extract.
幽婉
(二)高尾、鷹雄とも書く。
(三)天香山とも書く。

九　平安京

藤岡作太郎

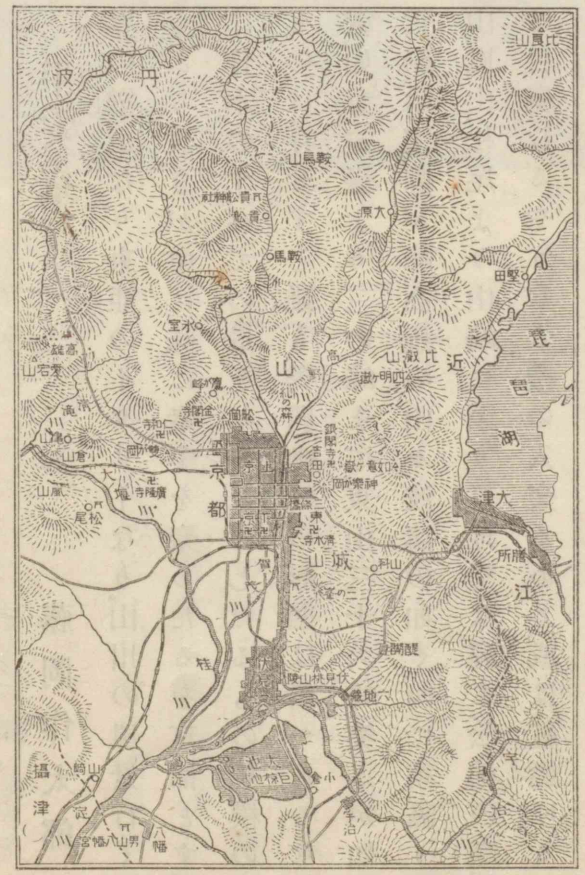
日本は世界の樂土なり、東亞のイタリーなり。山川の風景行く所として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を聚めたるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキス(一)にしたるもの。規模の雄大豪壯なるものは存せずと雖も、秀麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡、如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹が峰(二)、高雄の山々波濤の如く、西に稍隔りて愛宕、小倉、亀山、嵐山、松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠、色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織りこみたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日、夕日に照映ゆる色の千變萬化なるぞおもしろき。東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、大和の畝傍、香(三)

(一)耳成山とも書く。

宮柱太知る

具山、(一)耳無の如く近く相並びてあらねど、子の日の遊に小松曳く樂みなど、いづれ劣らぬ所がら。南に稍隔りて男山これに對し、國家鎭護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐも畏し。

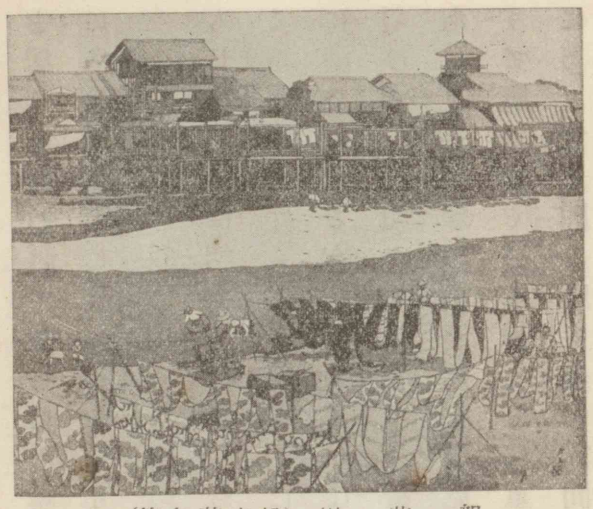
京の東端には賀茂川の流、糾(たゞす)の河合に高野の支流を集



(一)大堰川の下流。桂の渡から下流をいふ。
(二)嵐山の下を過ぎて桂川は賀茂川に合する。
(三)淀川。

茫洋
浩蕩
跌宕

(四)Alkali.



賀茂川（松宮芳年筆）

めて南に珠を碎き去り、西に桂河、(一)大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音凉しくまた南に向かふ。(二)二川南に合し、更に淀(三)の急流に流れこみて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるもの少しと雖も、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出で入る白帆の、町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛(四)

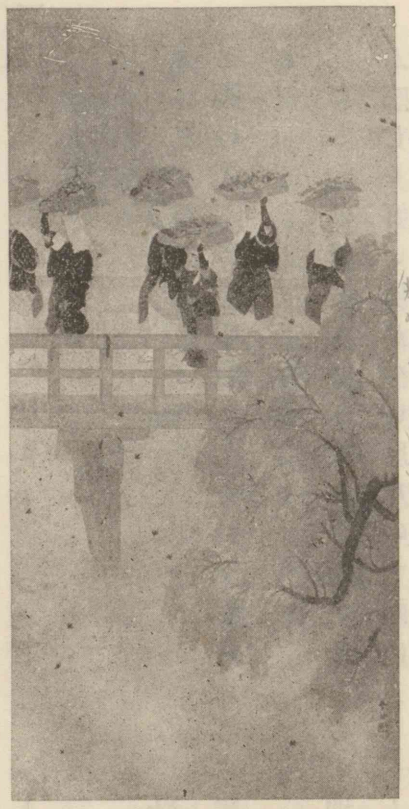
物を含めるにや、曝す布をも、人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居る所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしと雖も、海なくして清き京都は益〻清きなり。

山紫水明の語はよく京都の景色をいひあらはせり。何所の山水も、日中よりは朝夕の姿態のおもしろきは、水蒸氣の然らしむるところなるを知らば、三面を山にして土地濕潤に、水分を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至れるを見る。疾風さと吹き浪俄に高く、黑雲奔りて魔の如く、見るがうちに重り重りて海を覆ふ。浪の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。浪か、雷か、世界はただ一暗黑の中に沒し去るかと疑はれて、凄じかりき。かくの如き壯

山紫水明

黑雲魔の如し

絶なる景は、わが數年滯留中、遂に京都にては見ることを得ざりしところなり。されど下京(一)より吉田(二)に通ひたる朝な朝なの景色は、今もなほ彷彿として眼前にあるを覺ゆ。引きわたす霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一つ一つ彼方へと淡くなりて、向ふに寢たる東山は、あるかなきかの夢より未だ覺めやらず。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隱れて、聲ぞまづ朝もやを漏れ來る。時雨の景色のまたよその國には見られぬさまよ。愛宕の峰を覆ひて白く光りた



朝（長野草風筆）

(一)京都市三條以南をいふ。下京區。
(二)上京區。

あるかなきかの夢

(一)京都府宇治郡山科村。

山河襟帶

る薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらはらと面を撲つ。あはやと驚きもはてず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも晴れて、今は山科(一)あたりの山巡りするなるべしかゝる優しき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

—國文學全史—

自修文

一〇　京の雨

荻原井泉水

雨の美しさ。雨の趣。——それを私は京都に來てからほんたうに味はひ得たやうに思ふ。

春の雨の降るといふよりも、靜かにぬらす、地上を潤ほすといふ感じも好い。風が少い所なので、雨はしとしとしづくするやうに落ちる。賀茂川べりの柳、長い橋、古風な家構などが、皆雨を得て繪畫的に生きる。夏の雨のうちそゝぎ、烟らし、地の底まで浸すといふ感じも好い。若葉の緑もその雨を得て愈濃くなる、青い繪

紙本水墨紙にかいたすみゑ。

上梓書物を出版すること。

の具が流れさうにも見える。竹林からはその雨に依つて筍がぐんぐんと伸びる。墨の垂れるやうな雨空に道が薄白くあつて、竹林のにじんだやうな緑の前を、おつとりとした牛が、ぬれて牽かれてくる。全く紙本水墨の境地である。

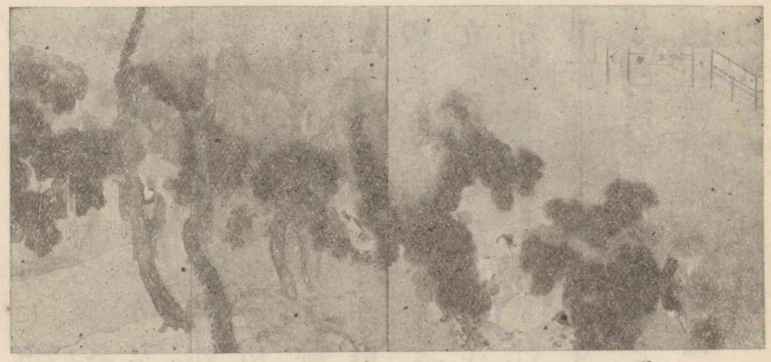
秋の終から冬の初に降る時雨の味はまたおもしろい。古人は時雨をほろほろと降るといつてゐるが、それは全くほろほろと輕いものがこぼれ落ちるやうな感じなのである。殊に竹の葉に觸れると輕く鳴るその音を聞いて、おゝ、時雨が來たのかと耳を立てる間もなく止んで、暫く立つと、再びほろほろとその音がする。庭の面を見ると、石がしつとりとぬらされてゐて、そこにまた薄い日がさしてゐる。昔の俳人は非常にこの時雨をめでたもので、芭蕉一門の選集として京都から上梓した猿蓑集には、その巻頭に時雨の句が並べてあり、京都に住んでゐた蕪村にも、時雨の句は特に多い。

(一)春ともならぬ。いのに驚かぬ竹林に來はじめて、かはいさうに時雨にぬれてゐることよの意。

(二)俳諧歳時記。四卷。瀧澤馬琴の著。享和元年（二四六一年）の自序がある。

(三)方廣寺のこと。天台宗。京都市洛東。

(四)臨濟宗東福寺派の大本山。京都五山の一。京都市洛東



北山時雨（上田萬秋筆）その一

鶯の竹に來そめて時雨れけり　燕村

夏の鶯を老鶯といひ、冬の鶯を笹子(ささご)といふと歳時記(二)にはあるが、實際は冬の初にやはり老いた鶯が鳴くものだといふことも、迂濶(うくわつ)ながらこの頃私は知つたのである。

あれ聞けと時雨くる夜の鐘の聲　其角

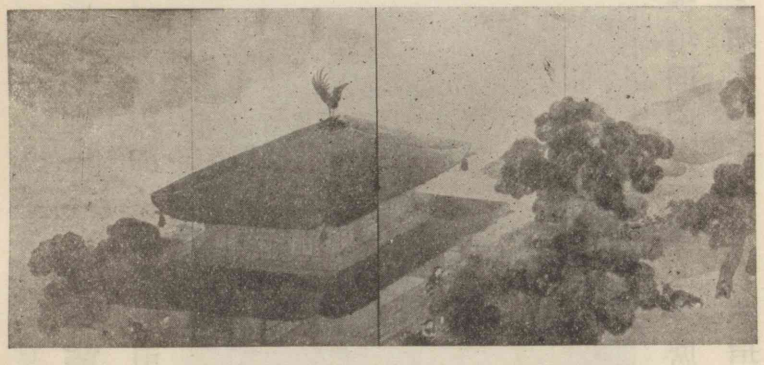
京都は寺が多いだけあつて、鐘の聲も到る所で聞かれる。知恩院の鐘、清水寺の鐘、大佛(三)の鐘、東福(四)寺の鐘、それぞれにその音色が違ふのである。

地文學者の話に依ると、時雨といふも

氣流　空氣のながれ動くこと。

盆地　山や臺地で圍まれた平な地。

漫然　深くも考へないでたゞぼつと。



北山時雨（上田萬秋筆）その二

のは、小さく凝集した雨雲が、ほつと解けて消えたり、またできたりする時々に起る現象なので、氣流の關係から或一局所に起るが、それは四周に山があつて盆地をなし、水蒸氣の多い、かつ冷易い所に限るといふことである。その點で京都は十分時雨の名所とするに足りる。ほんたうの時雨の味は、京都のやうな所でなければわからぬといつてもよい。東京や、その他の平野なり海なりに近い所で、冬の初に降る雨を漫然と時雨などといふのは、歳時記的の模倣に過ぎないだらうと思ふ。

(一)大正四年十一月。

仙洞御所

朝集所

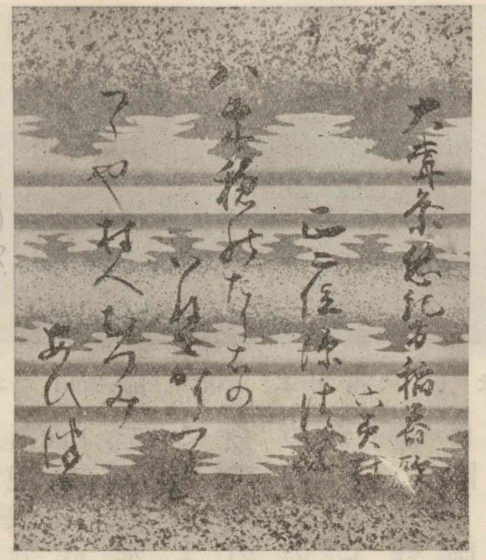
大嘗祭悠紀方稲舂歌　六美村　正二位源清綱

八束穂のたりほのいねをかりつみてつくや村人むつみあひつゝ

幄舍

一一　大嘗祭

(一)十日の即位禮から引續いての好天氣、大禮日和といふ語さへできた。十四日の夕方から仙洞御所内の朝集所へ參集。世界に類のない森嚴な大嘗祭は、夜を徹して行はれるのである。控所は幾室にも分れて、眩いほどの電燈の光、一々呼上げる官氏名の順序によつて、左右二列に分れて、大嘗宮南板垣門内の幄舍に着席する。電燈を籠めた數個の燈籠がほんのりと明るい。大嘗宮の柴垣が微かに認められるだけである。火焚屋に



黑田清綱詠並びに筆

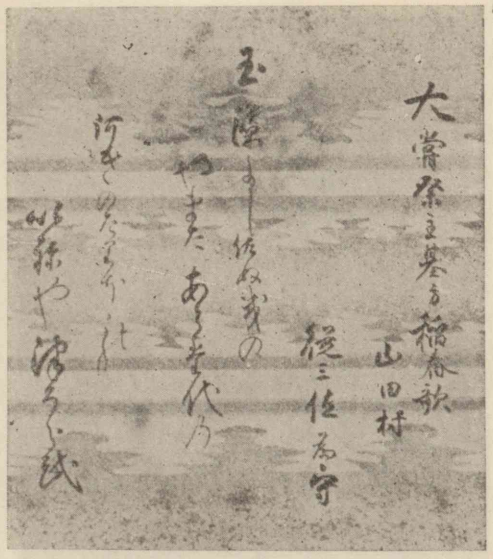
庭燎

大嘗祭主基方稲舂歌　山田村　從三位爲守

玉藻よしさぬきのやまたあらた代のあきのたりほのいねやつくらん

國風

燃える庭燎は、時に明るく、時に暗い。一同の着席が濟むと、薄明るい燈籠の火も消されて、ぬばたまの闇の夜である。



入江爲守詠並びに筆

一聲長い笛の音が樂舍から起つて、稲舂歌が高らかに吟ぜられる。徐に嚴かな調子で、神々しさが身に浸むやうである。稲舂歌が終つて、稍しばしのほどを經て、再び歌聲が起る。今しも國栖の國風が奏せられるのであらう。つゞいて風俗歌が歌はれる。大禮使の官人が起立着席を呼ぶ毎に、或は起立し、或は着座する。闇に包まれた千餘人の參列員は、端坐凝念して、身はさながら神代の昔に返つた心地である。今は掌典長の祝詞

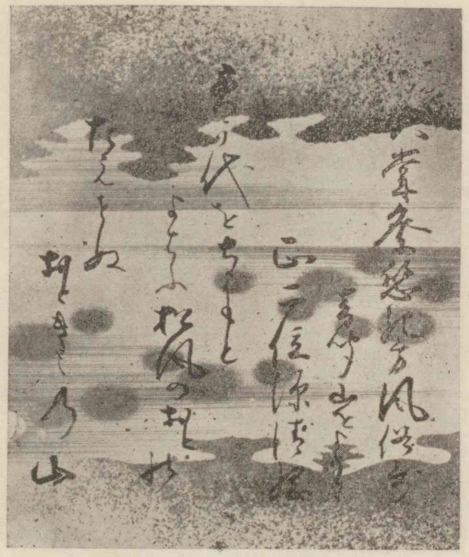
廻立殿

大嘗祭悠紀方風俗歌
音聞山をよめる
正二位源清綱

君か代をちよもとよはふ松風のおとのたえせぬおときゝの山

悠紀殿

が濟み、廻立殿からの渡御もあつたのであらうと、御祭の次第を想像し奉るにも、森嚴な氣が刻々に迫るやうに覺える。余が着座したのは左方の幄舍で、をりしも八日か九日の月が、松の葉越しに白砂の上を照らす。をりをり一陣の寒風が吹いて、古雅な單調な樂の響が、いつまでも斷えず續くのである。聖上には正に天神地祇を奉請あつて、御對坐あらせられるのである。樂の音の外には、人の音は全くない。眞に莊重嚴肅を極めたものである。この莊重嚴肅な御祭は、太古さながらの建築を傳へた大嘗宮の中に行はれてゐるのである。かくて悠紀殿の御祭が終



黑田清綱詠並びに筆

大嘗祭主基方風俗歌　岡
從三位爲守

雲井までたかくひゝかんさとひとのつゝみかをかに千代よはふこゑ

つたのは十一時二十分の頃であつた。朝集所へ立戻つて、夜食を賜はる。暖かい御酒、熱い吸物、幾たびか朱の御盃を傾けて、夜寒も忘れはてる。十五日の午前一時三十分、再び幄舍の座に着く。老齢の大官たちが拜辭して退下した爲であらう、幄舍の座席は以前よりも廣く覺える。このたびは樂舍が近いので、歌樂の音も一層鮮かに聞える。曉の寒さは三十分、一時間、次第に身に浸むと共に、嚴肅な氣分は一層に加る。樂の音が止んで、御祭のはてたのは午前五時二十分であつた。朝集所に退下して、再び御酒、御食を賜はる頃、東の空は漸

入江爲守詠並びに筆

く明るくなつた。

十日の即位の禮には、賢所大前の儀にも、紫宸殿の儀にも、外國の使臣も悉く參列した。それは朝日の輝く御宮、夕日の照らす大庭に行はれたので、莊嚴であり、雄大であつた。それに引きかへて大嘗の大御祭は、夜陰の中に行はせられる。參列の臣僚は柴垣を隔てて、肅然として陛下の夜を徹しての親祭に侍坐するのである。たゞ「森嚴」といひ、「神々しい」といふより外に、形容の語はない。即位の大禮に於ても、遠き國史を想ふの念は油然として湧いた。春興殿前の威儀の人、紫宸殿前の大小錦旛、古き國史の跡を考へて、愈、國家の昌運を欣慶するの情に堪へず、今より六十餘年前に御建築になつた紫宸殿に對し奉つては、殊に最近五十年來の皇室の隆運を默想し奉らざるを得なかつた。この太古の儀によらせれた大嘗祭に於ては、更に國史の各時代を超越して、西洋の文明は勿論、唐土、三韓の文化も入

つて來ない神代の昔を追念して、わが國體の尊嚴無比なことに、今更のやうに感激するのであつた。

いそのかみ古りし神代の神業を
をろがみまつるけふのかしこさ

一二　奥の細道　その一

松尾芭蕉

(一)月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。余もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白(三)河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招にあひて、取るもの手につかず。股引の破を綴り、笠の緒つけかへて

(一)夫天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客云々。(李白、春夜宴二桃李園一序)
(二)元祿元年。
(三)磐城國西白河郡古關村大字旗宿。
道祖神

(一)鯉屋杉風。杉山氏、名は元雅、鶴歩と號した。芭蕉の門人。江戸の人。(享保十七年二三九二年七十八。)歿。

別墅

(二)上野公園から西北に續く地。

夏草や兵ともか夢の迹　一茶書

(三)武藏國南足立郡。奥州街道最初の宿驛。

一茶賛芭蕉像

三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風(一)が別墅に移る。

草の戸も
すみかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺かすかに見えて、上野、谷中(二)の花の梢、またいつかはと心細し。睦まじき限りは宵より集ひて、船に乘りて送る。千住(三)といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゝぐ。

行く春や鳥啼き魚の眼は涙

矢立

(一)武藏國北足立郡。奥州街道の宿驛。

(二)「たよりあらばいかで都へつげやらん、けふ白河の關は越えぬと。」(拾遺集、平兼盛)

風騷の人

これを矢立の始として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

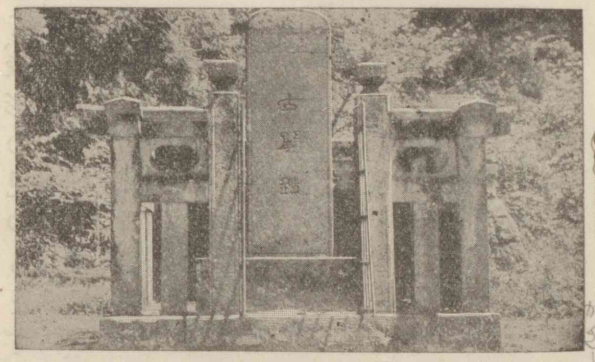
今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚たゞ假初に思ひ立ちて、吳天に白髮の恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと定めなき頼の末をかけ、その日漸く草加(一)といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれるものまづ身を苦しむ。たゞ身すがらにといでたるを、紙衣一衣は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨、筆のたぐひ、あるはさり難き餞などしたるは、さすがにうち棄て難くて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

心もとなき日數重るまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へと便求めしも理なり。中にもこの關は風騷の人、心を留(二)む。秋風を耳に殘し、紅葉を面影にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人

(一)蘇原清輔。二條天皇の御代の歌人。
(二)芭蕉の門人。俗稱河合宗五郎、旅行の同伴者である。
(三)磐城岩代を流れる大河。
(四)磐梯山のこと。
(五)磐城國石城郡。
(六)同相馬郡。
(七)同田村郡。
(八)岩代國岩瀬郡。子石と須賀川との間にある。
(九)同岩瀬郡新田。
(一〇)姓は相良、名は伊左衛門。等躬はその號。芭蕉の門人。寳永二年(二三六五年)歿。年七十八。

冠を正し、衣裳を改めしことなど、清輔の筆にも留め置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな　曾良



とかくして越えゆくまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津嶺高く、右に磐城、相馬、三春の白河の關の故址を行くに、けふは空くもりてものの影うつらず。須賀川の驛に等躬といふものを尋ねて、四五日留めらる。まづ白河の關いかに越えつるやと問はる。長途の苦み、身心疲れ、かつは風景に魂奪はれ、懷舊に腸を斷ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

風流のはじめや奥の田植歌

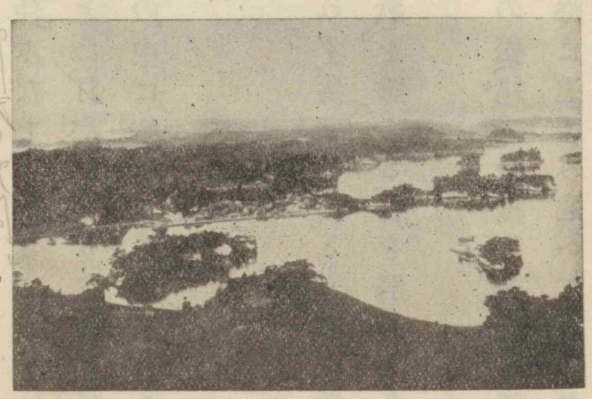
(一)支那浙江省に在る。一名錢塘江。海嘯の奇を以て知られてゐる。
(二)山を掌る神。

一三　奥の細道　その二

舟をかりて松島に渡る。その間二里餘。

雄島の磯に着く。

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭、西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。島々の數を盡して、峙つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。或は二重に重り、三重に疊みて、左に別れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃やかに、枝葉汐風に吹きためられて、屈曲自ら撓めたるが如し。干早振神代の昔、大山祇の成せる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡さん。



松島

雄島が磯は地續きて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などあり。はた松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穗、松かさなどうち煙りたる草の庵に閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづ懷かしく立寄るほどに、月海に映りて、晝の眺また改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寢するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

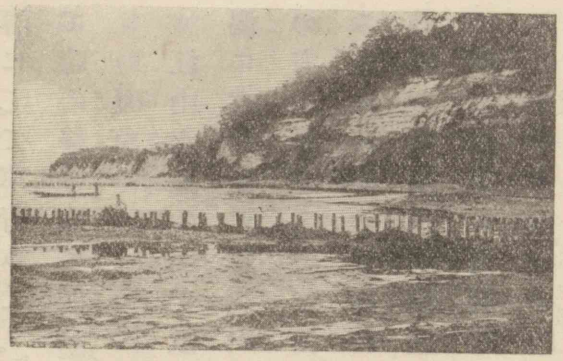
松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

余は口を閉ぢて、眠らんとしていねられず。舊庵を別るゝ時、素堂松島の詩あり。原安適、松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きて今宵の友とす。かつ杉風、濁子が發句あり。

十二日、平泉へと志す。聞傳へたる姉齒の松、緒絶の橋など人跡稀に、雉兎芻蕘の行交ふ道そこともわかず。終に道ふみ違へて、石の卷といふ湊に出づ。「黃金花咲く。」と詠みて奉りたる金華山、海上に見わ

(一)禪僧。土佐の人。萬治二年(一六五九)歿。年七十八。
(二)山口素堂。俳人。享保元年(一七三六)歿。年七十五。
(三)醫者。芭蕉の友人。江戸の人。
(四)芭蕉の門人。姓は中川。美濃國大垣の人。
(五)陸中國西磐井郡。北上川東を流れる。
(六)陸前國牡鹿郡の町。
(七)「すめろぎの御代榮えんとあづまなる、みちのく山にこがれ花さく。」(萬葉集)

たされ、數百の廻船入江に集ひ、人家地を爭ひて、かまどの煙立續きたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸く貧しき小家に一夜を明して、明くればまた知らぬ道迷ひ行く。袖の渡、尾駮の牧、眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に到る。


衣川遺址

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形をのこす。まづ高舘に上れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城を遶りて、高舘の下にて大河に落入る。泰衡が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし堅

(一)同國桃生郡橋浦村。
(二)同牡鹿郡稻井村の字。
(三)同上。よそめに見て
(四)同登米郡新田村田沼。
(五)同郡登米町。
(六)藤原清衡。基衡、秀衡。
(七)平泉舘址、奥の御舘。
(八)秀衡が作つた平泉鎭護の山。富士山に擬して雌雄の金鷄を山上に埋めた。
(九)衣川舘。義經の居舘。
(一〇)泉三郎忠衡の居舘。

め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落しぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

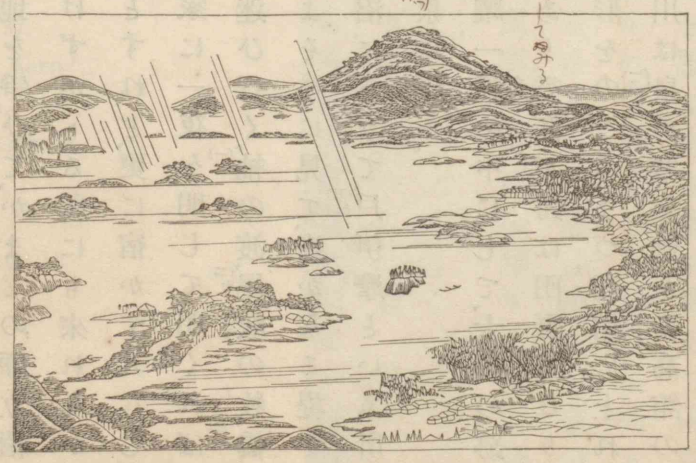
「江山水陸の風光數を盡して、今象潟の方寸を責む。酒田の湊より、東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏みて、その間十里、日影稍傾く頃、汐風眞砂を吹上げ、雨濛朧として鳥海の山隱る。闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色またたのもしと、あまのとま屋に膝を容れて、雨

功名一時の叢となる
(一)「國破れて山河在り。城春草木深し。」(杜甫)

(二)羽後國由利郡。鳥海山の西北麓。その海岸はその後文化元年鳥海山の噴火によつて埋沒した。

(三)羽後國飽海郡の町。

闇中摸索



象潟（芭蕉翁繪詞傳挿畫）

の晴るゝを待つ。

その朝天よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮かぶ。まづ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向ふの岸にあがれば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。寺を干滿珠寺といふ。この寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼のうちに盡きて、南に鳥海天をさゝへ、その影映りて江にあり。西はむやむやの關路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙かに、海北にかまへて、浪うち入るゝ所を汐越しといふ。江の縱横一里ばかり、おもかげ松島に通ひてまた異なり。松島は笑ふが如く、象潟はうらむが如し。寂しさに悲みを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

—奥の細道—

(一)能因法師が閑居のあとといひ傳へられる。

(二)「ささがたの櫻は波にうづもれて、花の上こぐあまの釣り舟。」(西行法師)

方丈

(三)陸前國名取郡。羽後の境の關谷山にあつた關。また由利郡小砂川から吹浦へ越える所とも いふ。

うたかた

いらかを爭ふ

無常を爭ひ去る

一四　方丈の室

鴨長明

『行く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家とまたかくの如し。玉敷の都のうちに、軒を並べ、いらかを爭へる、たかきいやしき人のすまひは、代々を經て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず、人も多かれど、昔見し人は、二三十人が中に、僅かに一人二人なり。朝に死し夕べに生まるゝならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。また知らず、假の宿り誰が爲に心を惱まし、何により て目を悅ばしむる。そのあるじと住家と、無常を爭ひ去るさまいは

たづき

(一)「住みわびて我さへ軒のしのぶ草かたがたしのげき宿かな。」（金葉集、周防内侍）

(二)高倉天皇の晩年。安元、治承の頃。

(三)賀茂の川原。

ば朝顏の露に異ならず。あるは露おちて、花殘れり。殘るといへども朝日に枯れぬ。或は花凋みて、露なほ消えず。消えずといへども夕べを待つことなし。

鴨長明

わが身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。その後、緣かけ身衰へて、(一)忍ぶ方々しげかりしかば、遂に跡とむることを得ずして、(二)三十餘りにして更にわが心と一つの庵を結ぶ。これをありし住居になぞらふるに、十分が一なり。ただ居屋ばかりを構へて、はかばかしくは屋を作るに及ばず。僅かに(三)ついぢをつけりといへども、門たつるにたづきなし。竹を柱として車やどりとせり。雪降り風吹くごとに、危からずしもあらず。所は川原近ければ、水の難深く、白波の恐もさわがし。

(一)長明が五十歳の春。後鳥羽天皇の建久の頃。
(二)一名小鹽山。京都府乙訓郡にある。京都市の西。
(三)土御門天皇建永の頃。

土居

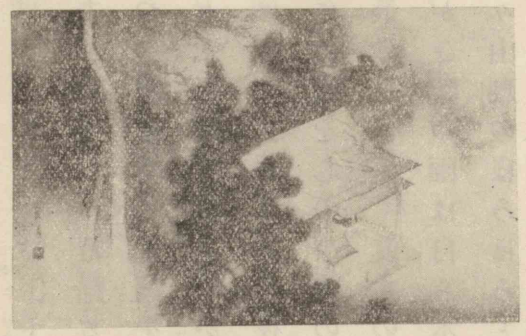
すべてあらぬ世を念じすぐしつゝ、心を惱ませることは、三十餘年なり。その間をりをりのたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。乃ち五十の春を迎へて、家を出で世をそむけり。もとより妻子なければ、捨難きよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめん。空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をか經ぬる。

ここに六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿りを作り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分の一にだも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々に傾き、住家はをりをりにせばし、その家の有樣よの常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるが故に、地をしめて作らず。土居をくみ、打覆をふきて、つぎめ毎にかけがねをかけたり。若し心にかなはぬことあらば、易く外に移さんが爲なり。その改め作る時、いくばくの煩かあ

(一)京都府宇治郡木幡山の東北なる日野山の麓。
(二)宇治郡高が嶺の北。俗に關山といひ、木幡の關の址であるといふ。
(三)紀伊郡にある。鳥羽も同郡。羽束師は乙訓郡。

(茅花)
(零餘子)
ほぐみ

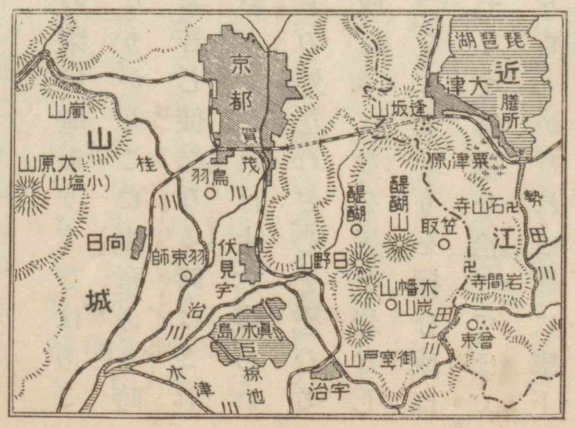
る。積むところ僅かに二輛なり、車の力をむくゆる外は、更に他の用途いらず。



幽棲（伊藤龍涯筆）

また麓に一つの柴の庵あり。ずなはちこの山守が居る所なり。かしこに小童あり、時時來りてあひ訪ふ。若し徒然なる時は、これを友として遊びあり。かれは十六歳、われは六十。その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。或はつばなを抜き、岩なしを採る。またぬかごをもり、せりを摘む。或はすそわの田ぼに至りて、落穗を拾ひてほぐみを作る。若し日うらゝかなれば、嶺に攀上りて、遙かに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみわづらひなく、志

とほくいたる時は、これより嶺つゞき炭山を越え、笠取を過ぎて岩間に詣で、或は石山を拜む。若しはまた粟津の原を分けて、蟬丸の翁が跡をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸大夫が墓をたづね、歸るさにはをりにつけつゝ櫻を狩り、紅葉をもとめ、わらびを折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家づとにす。若し夜靜かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。叢の螢は遠く眞木の島のかゞり火にまがひ、曉の雨は自ら木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろほろと啼くを聞きても、父か母かと疑ひ、峰のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或は埋火をかきおこして、



(一)宇治の御室戸山の東北方。
(二)宇治の醍醐山の東方。
(三)滋賀縣滋賀郡。石山も、粟津も同郡。
(四)同栗太郡。宇治の川上。
(五)百人一首中の歌人。年代不詳。
(六)京都府久世郡宇治川の西。
(七)「山鳥のほろほろと聞けば、父か母かとぞ思ふ。」(玉葉集、行基菩薩)
(八)「いふこともなき埋火をおこすかな、冬のねざめの友しなければ。」(堀川百首、藤原國信)

(梟)

(一)Ilm.
(二)東京市の北郊王子町にある細流。

老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれぶにつけても、山中の景色をりにつけて盡くることなし。

——方丈記——

一五　ワイマールより

藤代禎輔

ワイマールは小さき都にて、山水の景勝に富めるにもこれなく候へども、いかにも閑靜にて人氣良く、誠に居心地よき所に候。公園には森の繁れる中を、イルム(一)といふ瀧(二)の川くらゐの流ちよろちよろいたし居り、その上には鐵の欄干に石柱といふ嚴しき橋もあれど、丸太を組合はせて架けたる風流なる橋もありて、シルレルの腰掛とか、ゲーテの休息小屋とか、いづれも昔通り保存せられて、古をしのぶ跡到る所に散在いたし居候。一々委しく點檢して詩作との關係など取調べ候はば、よほど興味あることならんが、短日月の滯

在にてはそれもできかね候ふまゝ、通り一遍の旅客として、目に觸れ候ふところを御報申上候。

けふ第一番に足を運びたるは圖書館に候。この圖書館は、初はゲーテがわが書齋にとて自ら設計したる建築の由。珍書奇籍も夥しく、ゲーテ、シルレルを始め有名なる人物の彫像、肖像畫など、貴重なる品も數々ありて、今まで文學史の挿畫にて纔かにその面影をしのびゐたる名作の實物に接し、(一)トリッペルが靈腕に彫まれたる(二)アポロそのまゝとの評あるゲーテの大理石像、(三)ダンネッケルが妙技を揮ひしシルレルの半身像など、凝然見惚れて案内者に急きたてられ、不承不承歩を移すといふ始末、まゝになるならいつまでもここにゐて、朝夕

像テーゲ
（トリッペル作ルーマイロ圖書館藏）

(一) Alexander Trippel. ドイツ著名な彫刻家。（西暦一七四四年―一七九三年）

(二) Apollo. ギリシヤ、ローマの神話中重要な神の名。

(三) Johann Heinrich von Dannecker. ドイツ著名な彫刻家。（西暦一七五八年―一八四一年）

詩聖

神來の筆

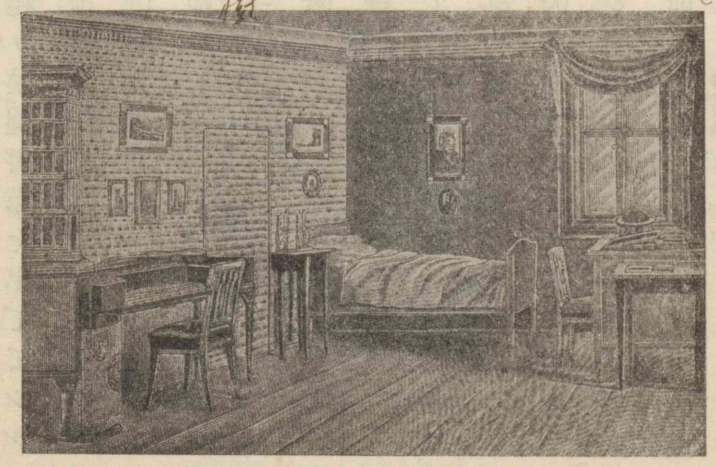
これ等の逸品を眺めたしとの念も起り候。圖書館を出でてシルレルの住宅を音づれ候。表よりの見附はさして立派といふ建物にはこれなく候へども、窓の板戸が綠色に塗立てあるさまなど、なんとなくゆかしき心地せられ候。中に入りて一階二階は梯子段を見しばかり、三階に至りて應接室、書齋、臨終室を一覽いたし候。一切の裝飾品を取除けて、詩聖が使ひ馴れし文房具、椅子、寢臺、掛額等を据附けあるばかりなれば、至つて質素に候へども、この内に起臥して晩年の傑作をものせし現場かと思へば、感慨限りなく、腐れ林檎の香を嗅ぎて深更まで意匠を凝らしたるは、この机の前にやあらん、嗅煙草に睡魔を驅りて神來の筆を馳せたるは、かの窓の下ならんなど、詩人ならぬ

像ルレルシ
（ダンネケル作ルーマイロ圖書館藏）

饒舌

わが身も空想の天地に馳往きて、案内者の饒舌も耳に入らず候。臨終室を見るに及びて、その餘りに狹隘なるに驚き、かゝる偉人がこのむさくろしき部屋にて息を引取りたるかと、そゞろに暗涙に咽せび候。

ここを立出で、國君の墳墓に詣で候。これはワイマール代々の君主が遺骸を納むる圓天井の石室にて、ゲーテ、シルレルの棺もこのうちに安置せられ、木棺の上部は月桂樹の葉にて堆く蔽はれ、ゲーテの頭部には金製、シルレルのには銀製の月桂冠を供へあり候。両詩人の優劣は存命



シルレルの書齋

布衣

身を布衣に起す

ゲーテの書齋

中よりとかく議論ありてゲーテ自身も「強ひて一人に團扇を上げずとも、これほどの詩人を二人まで出したりとドイツ國民は喜ぶべきはずなるを。」といひたるくらゐなるが、今この金銀の差別を見て、勿論両詩人の地位若しくは逝去當時の事情に由るとはいへ、シルレルは死後まで薄倖なりとの感を起し候。しかし、身を布衣に起して、王者と共に同一石室に葬らるゝは、比類なき名譽とも申すべきか。感歎の餘り、両詩聖の棺の上なる月桂樹の葉數葉を摘取り、記念にとて持歸り候。

時めく

(一)Jena. ドイツ、サクセ・ワイマールの首都。

(二)Wurzburg. ドイツ、ババリヤ王國の都府。

これよりゲーテの住宅に赴きしが、さすが宰相の地位にありて當代に時めきし詩人のこととて、シルレルの居宅などとは比較にならぬほど廣大なるものなれど、現今の程度よりいへば、極めて質樸にて、これまた案外の感に打たれ候。ゲーテの寢室に入りて、シルレルが臨終の際ゲーテも病蓐につき居りしかば、家人はシルレルの死を告げなば病氣に障りなんとて秘しけれど、素ぶりに覺りてその實を察し、潸然流涕したりとの一事を思ひ浮かぶれば、両詩聖の交情は東西古今に例なく美しきものなりけりと、感涙禁め難く候ひき。

ワイマール見物も一通り相濟みたれば、明日この地を發足いたし、(一)イエナを經て(二)ウルツブルグに赴くつもり、行く先々の模樣は追追通知いたすべく候。

—帝國文學—

自修文

文豪　詩歌や文章に特にすぐれた人。

鷲　鷹

(一)Elizabeth. ゲーテの母。

先天的　生まれ出ぬさきから身に受けてゐること。

鳶が鷹を産む　平凡な親がすぐれた子を生むにいふ。

後天的　生まれ出てから身にうけたこと。

愛撫　化身

一六　ゲーテとその母

ひとりドイツ國民ばかりでなく、廣く人類一般の誇である文豪ゲーテの一生ほど、絶えず温かい愛の光で照らされてゐたものは少いであらう。彼の生活に於て、友人の愛や同胞の愛が、常人の場合より遙かにすぐれたものであつたにも拘らず、なほこれ等を壓して燦然として輝きわたるところの愛の光があつた。それは母の愛である。(一)エリザベットのわが子ウォルフガングに對する極めて人間的な愛であるゲーテがあれほどの大詩人になつたのは、一つは先天的に鳶が鷹を生んだのではなく、鷹が鷲を生んだといつてよいほどに、両親から優秀な素質を受けて生まれたからでもあるが、また一つは後天的に、幼年期より成年期へかけて、「女らしさ」と、「悅」と、「空想」との化身ともいふべき母親の愛撫と教導とを受けたからである。

ゲーテは後年機會ある毎に、このことを母に對して感謝して

ゐた。誠にこの母がなかつたならゲーテは或は衒學的で厭人的な腐儒で一生を終つたかも知れなかつた。かういふ母を持つた子供も幸福である。またかういふ子供を持つた母も幸福である。

ゲーテは母の庇護の下に、天才の芽を伸した。母は自分が伸してやつた天才の爲に、その名を不朽にした。ヨーロッパ全土を風靡する偉大な精神的人物の母として、王侯貴族や文人學者の崇拜的訪問を受けた。實にゲーテの母エリザベットは、婦人としてこの上もなく生きがひある生活を成遂げたのである。

母の處女時代の名はカタリーナ・エリザベット・テキストルで、(一)フランクフルト・アン・マインに同市の名望家ヨハン・ウォルフガング・テキストルの總領娘として生まれた。父家は先祖代々學者や官公吏を出し、貴族でもなく富豪でもないが、常に社會上に高い地位を占めてゐた。父は法律學を研究して、フランクフルトの市政に關係し、遂に市長に選ばれ、終生かはらなかつた。母はマー(四)

衒學的　才學をてらひほこること。
腐儒　實際の役に立たぬ學者。
庇護　かばひまもること。
(一)Katharina Elizabeth Textor.
(二)Frankfurt am-Main. ドイツ西部の都會。
名望家　世人から仰ぎたゝへられる人。
(三)Johann Wolfgang Textor.（西暦一七三一年―一八〇八年）
(四)Margaret.

ガレットといつて、法律家の家に生まれたが、少しも惡い評判を立てられなかつたといふことの外、一向傳はつてゐない。

市長の美しい愛孃といふことが、エリザベットを獨身者の仰望の的とせずに置かなかつた。間もなく王室顧問官ヨハン・カスパル・ゲーテ(一)が、かの女を妻に申し受けたいと望んで、首尾よく父の承諾を得た。自分と二十一も年の違ふ、少し衒學的の男を餘り好いてはゐなかつたであらうけれども、といつて、エリザベットは素直な娘の常として、威嚴に富んだ風采堂々たる紳士を、素氣なく拒絶するほどの强固な根據も持つてゐなかつた。そこで漸く子供ばなれのした淑女は、親子ほどの年の違ふ夫を父親から與へられて、新生活に入ることになつた。

この夫婦の結婚生活は、喜悅と幸福との間に送られたが、同時に悲哀も喪失もあつた。姑は健かで、最初は家政を見てゐたが、やがて隱居所へ籠つてしまつた。孫たちがよく懷いた。姑と嫁との

(一)Johann. Caspar Goethe
喪失　うしなふこと。

間も圓滿に行つた。エリザベットがどれほど新しい母に愛されたかは、姑が子供夫婦の結婚後六年目に死期の近づいたのを豫感して、子供のつゝましさから苦勞をしはすまいかと、約九百圓の金を內證で嫁に與へたといふ話でも明らかである。結婚後ちやうど一年目でウォルフガングが生まれ、十五個月遲れてコルネリア[一]が生まれた。引續き四人の子供を擧げたが、この四人は悉く育たなかつた。

ゲーテの母の評傳を書いたハイネマン[二]はいつた、「この若い婦人は、恐らく自分に提供された結婚生活より別なものを期待してゐたかも知れないが、結婚第二年目の八月二十八日からは、世にかの女より幸福な婦人はなかつた。」と。エリザベット自身も第一子ウォルフガングを擧げた時の喜を、「母と呼ばれること……これこそ自分の幸福を包括する唯一の名である。」といひあらはした。ウォルフガングは丈夫に育つて行つた。やがて家庭教育が

〔一〕Cornelia.
〔二〕Heinemann.

始められた。妻の教育者であつた良人は、間もなくウォルフガングの熱心な家庭教師になつた。けれども彼の教育のし方は、根本から母のとは違つてゐた。彼はいつも嚴重な教案を立てて、よく肝癪を起しながら、さまざまなことを教へこんで行く。母はその反對に、若々しい氣持から、ほんたうに子供のやうな氣になつてわが子と遊んだり、空想的な遊戯に耽つたり、笑つたり騷いだりするといふ風であつた。

慧敏なウォルフガングは、両親の全く違ふ二つの態度をどう受取つたであらうか。頭腦のいい彼は、父の授けた詰込主義の教育をさほど苦にしなかつた。父は一種の天才教育を實行した。子供は實に廣汎な知識を授けられた。歷史、地理、數學、宗教の他、圖畫、舞踏、音樂、擊劍、馬術を修業させられた。父が旅行中蒐集した鑛物の標本や記念物が、有益な實物教授の爲に使はれた。中にも驚かれるのは語學の授業である。佛語、英語、イタリー語、さてはギリシ

天才教育　生來もつてゐる獨得な才能を發達させる爲に施す教育。

ヤ語、(一)ラテン語の古きに及び、聖書をヘブライ語(二)で讀むまでになつた。少年ゲーテがこれほどの負擔を餘り難儀と考へなかつたのも、更に驚くべきことであつた。

少年ゲーテが若い母から受取つたものは、喜ばしい世界である。愛と、空想と、悦との世界である。この意味から、智的な冷たい父に、母子が一種の結束をして相對してゐたことは、晩年の彼が委曲を盡して述べてゐる。確かに熱情もあり、好意もあるが、しかし、生眞面目な父は、內面には眞に優しい心を抱いて居りながら、外面には不思議なくらゐに徹底的に鐵血的な嚴酷を見せてゐた。それは彼が、その子供たちに最善な教育を與へ、堅實な家庭を建設し、整頓し、維持するといふ目的を達する爲である。これに對して母は殆どまだ子供であつて、かの女の上の子供二人と一緒に、また彼等の中に始めて一人前の女に成育した。この三人は生ききとした力があつて、現前の享樂を願望しながら、健かな眼を

(一) Latin.（羅甸語、拉丁語）ローマの上流社會に通用した語。今は學術語として萬國に通用してゐる。

(二) Hebrew. ユダヤ人共用の語。ユダヤ教徒の信奉した舊約聖書の原文はこの語でかゝれてゐる。

結束　一致して。

委曲　つぶさをきはめる。

生眞面目　ごく眞面目なこと。

以て世界を眺めてゐた。

ウォルフガングは長じて十六歳になつた時、(一)ライプチヒの大學へ法律學を學びに行つたが、このわが子の遊學が、母エリザベットに取つてどれほど辛いものであつたか、想像に餘りある。唯一の精神上の友を失つたかの女は、全く孤獨で取殘された。さうした三年の歳月が經つた。やがてウォルフガングは心身病み衰へて、かの女の手許に戻つて來た。彼はコルネリアと一緒に夢中で看護した。この時ほど神を信ずる心がかの女の心に强く働いたことはなかつたといはれてゐる。

神はこの母の敬虔な願を斥けなかつた。かの女の子息がスト(二)

ゲーテとその母

(一) Leipzig. ドイツのサクソニーにある。

(二) Strasburg. ドイツのアルサス・ローレンにある。

ラスブルヒの大學へ行つて、千七百七十一年に再び歸つて來た時には、早すでに一廉の文學者として世間に認められてゐた。かの女は相變らず天才肌の子息と、老境に入るに隨つて益、頑固になる一方の夫との間に立つて、絶えず氣を使つてゐたが、日に月に揚る子息の名聲は、その骨折を酬いて餘りあるものであつた。彼は二十五歳で一躍歐洲劇壇の大家となり、その翌年また世界的の小説家となつた。

文豪の母たることは、エリザベットに取つて果してどれほどの誇であつたらうか。かの女の妻として母としての長年の「愛の苦行」は、かうして最も美しい、最も滿足すべき形で酬いられることになつたのである。

—島村民藏の文による—

(一)戯曲「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」を公にした。

(二)「若きベルテルの惱み」を出した。

苦行　極めてつらい修行。

一七　啄木鳥を聽く日

吉田絃二郎

おすは東京へ歸らうと思ひながら、一日、二日と延してゐる間に、

伊豆の旅も半月になつてしまつた。全く東京へは餘り歸りたくはない。

二三日前降つた初雪が、天城の北側の谿にほの白く殘つてゐる。里では一寸にも足らぬ淡雪で、半日のうちに消えてしまつた。

私は毎日山に登つては天城の雲を見る。いろいろな形の、いろいろな色彩の雲が岫を出てくる。ラスキン(一)の雲についての論文を思ひ出すこともある。見てゐても見てゐても飽くことのないのは、芝山を出てくる雲の形であり、色である。夕暮の空の落着、雲の色は殊にいい。旅で見た夕燒の美しかつたのは、琵琶湖畔の枯葦の間から見た比叡山の空であつたが、天城にかゝる夕燒の雲を松林の間に見るのも、なかなかいい。午後の四時頃になると、松山も一鳥啼かぬ靜寂にかへり、日は草山の上に落ちかゝる。間もなく天城の谿々には暮方のもやが漂ひ始める。と同時に、さつと一抹掃立てられたや

(一)John Ruskin. イギリスの美術批評家。(西暦一八一九年—一九〇〇年)

うな形の夕燒雲が、西南から東北方の空へかけて吹流される。炎々として空は燃える。ちやうどその頃である、振返つて乙女峠の方を見ると、思ひも寄らぬ所に突兀として高い山が浮かび出してゐることがある。幾たびか自分の眼を疑ふ。雲だと信じながらも、なほ自分の眼を疑はないではをれぬことがある。

日の影が全く失はれてしまふ。きのふは、をとつひと全然違つた夕燒の空を見たけふはまた、きのふとは全然違つた夕燒の空を見た。しかも夕燒の空が暮色に包まれてしまつた刹那に、そこにはをとつひも、きのふも、けふも、一樣な宵の明星だけが、寒空に欄干として輝いてゐる。同じ夕暗だけが、寂然として谿あひの温泉町を包んでゐる。

人々は扉を閉して、寒空の星を見ることをしない。北の風が夜な夜な枯山を掃ふので、空は研ぎすまされてゐる。川は痩せて、巨岩だ

けが白骨の如く薄闇の底に横たはつてゐる。

そこに立つて人生を考へ、悠久を思ふことが、毎日薄暮の山を下る私の日課となつてしまつた。

太陽が照つてゐる間は、私は山を忘れてゐる。川を忘れてゐる。日が暮れるにつれて、私は始めて山の形を見、山の深さを知る。川の聲を聽き、川の流を見る。

欄によつて、ペンを走らせてゐる手を休めて空を仰ぐと、十國から天城へかけて幾十里の空を、全く素絹を一筋一筋引伸したやうなか細い雲が、空一面を包んでしまつた。なんといふ美しさであらう。なんといふ莊嚴さであらう。

若し生まれてから死ぬまで一生雲を眺め通しに眺めて、人類の爲に何一つ遺さないで死んだものがあつたとしても、私はそのものをトルストイより小さい人間だとはいひたくない。

一生涯夜の川の音のみを聽いてゐる男。一生涯木の葉の戰ぎのみを見てゐる男。そのやうな男がいつの世にも一人や二人はあつてもいいはずである。

山を背にし、太陽を背にして本を讀んでゐると、時々山を掠めて走る薄雲が、日の光を掠める。そのたんびに本の白いページの上に薄い影が漂ふ。同時に私の心が暗くされる。

雲が通り過ぎてしまふ。日の光がぱつと本の白いページの上に明るく漂ふ。私の心が明るくされる。

心の明暗くらゐ變り易いものはない。一枚の木の葉の戰ぎにも心は動く。肯定的人生觀といひ、否定的人生觀といひ、詮じつめれば一枚の木の葉が右に戰ぐか左に戰ぐかの差である。南の風が吹く日と、北の風が吹く日と、すでに私たちの心の明暗は違つてゐる。

「春なれや名もなき山の薄霞」の情景には、まだ幾日の隔りがある

戰

肯定的人生觀
否定的人生觀

やうであるが、伊豆の山の畑の麥は、すでに二三寸に伸びてゐる。青い麥畑の間を點綴する赤い杉苗の爲に、色彩の單調さが破られて、春淺い芝山の眺も、さすがに氣色だつて見える。梅はもう盛である。さすがに名もない芝山も、梅あり、椿あつて、旅人の心を惹くに足りる。

天城の麓、谿といふ谿には淙々の聲があり、川のある所谿あひの耕作地があり、家がある。朝、川に沿うて谷を下れば、村のある所必ず朝餉の炊煙が、霞の如く、もやの如く芝山の腰に漂うてゐる。このやうな靜かな山村の風光を、私は幾年ぶりで見たであらう。汽車がなく、自動車がなく、電車がなく、新聞紙がない山村の生活が羨ましい。

夜の二時三時頃である、谿川の音に夢を破られては、鷄の聲を聽くこともある。子供の頃、父や母がよく一番鷄の聲だの、二番鷄の聲だのといつてゐたことを思ひ出す。あの頃は、父も母も鷄の聲をた

點綴

淙々

朝餉

厩

よりに起きてゐた。父は背戸の軒下から夜明の星をのぞき見ては時刻をはかつて、草鞋を穿いて家を出て行つた。曉に近づくにつれて、霧が深く山や平原を埋めてゐた。恐らく都會で育つた子供たちは、曉の鷄鳴の情調を知らないであらう。村の端から、次から次へと家々の鷄が、霧を隔てて、流を隔て、森を隔てて鳴いてくる。或時は遠くより近くへ、或時は近くより遠くへと鳴きわたる。

粉雪ふる朝（勝田蕉琴筆）

厩では頻りに馬が板を蹴つてゐる。誰かが鎌を研いでゐる。土間

曾めて

白皚々

寒念佛

(一)古今集にある。

(二)延喜頃の人。壹岐守、古今集の作者の一人。

には火がちらちらと闇を嘗めて燃える。憂欝な田圃の朝である。曉の鷄鳴は過去のさうした景情を蘇らせる。私の心は暗くされる。

きのふ芝山を歩きつゝ富士を見、中央山脈の白皚々たるを見た。松山の中を歩きつゝ、ふと啄木鳥の松の幹をつゝくのを見た。高い松の幹をつゝく單調な音は冬の山にこだまして、限りもなく寂しい。ただ一羽こつこつと木をつゝく啄木鳥の姿は、更にわびしく思はれる。伴もない寒念佛の僧を見るやうだ。

一八　歳暮

(一)きのふといひけふと暮して飛鳥川
流れて早き月日なりけり

(二)は春道列樹の歌であるが、實にや初春の初子長閑によみそめた暦

の紙も數減つて、一年三百六十五日は夢の間。かうなつてはうれしい樂しい追懷よりも、勤むべき道、爲すべき業の怠がひしひしと身を責めるので、とりわけ學者などにあつては、

見る書はのこり多くも年くれて
わが世ふけゆく窓のともしび

と悔まれるのが常であり、また老人などは、今更ながら寄る年波に心細さもうち添ふので、

新玉の年のをはりになる毎に
雪もわが身もふりまさりつゝ

とながめられもする。

とはいへ、餅つき競ふ家の内、松伐りたてる軒のさまなどから、行きかふ人のしげさやら、飾りたてた市店の花々しさやら、見るものの聞くもの、何一つ賑はしからぬものもなく、忙しげならぬものもな

(一)荷田春滿の歌。
(二)古今集、在原元方の歌。

い世のならはしに伴なうては、たゞうかうかと、年の瀬を越え行く人が多からうだが、それも實はものに不足のないあたりのこと、

貧乏のぼうが次第に長くなり
ふりまはされぬ年の暮かな

といつた如き境涯や、やりくり算段も盡きはてて、

分別の底たゝきけり年の暮

と、途方にくれる身に取つては、ここ數日が泣いても喚いても追つつかぬ大修羅場、人さまざまな悲劇喜劇に、天道を恨むものさへ少くはないであらう。

歳暮に、東都では古くから「歳の市」といつて、廣い街路に露店を出し、新年用の物品を商ふことがあり、古人の海山のもの一聲に年の市といひ、

(一)萬載狂歌集所載よみ人しらずの歌。
(二)芭蕉の句。
修羅場
(三)魯江の句。

(一)曾良の句。
(二)Mantle.
徘徊する
(三)堀河院初度百首國信の歌。

と賑はしたのは、今もかはらぬ有様で、燈火の光天を焦し、賣聲の頗る勇ましい中を、マントやコートに身をぬくめた紳士淑女などの買物に徘徊するのは、誠にふさはしくも、またうれしい光景である。

暮も愈〻最終の一日となつては、誰しも

何事を爲すともなしに明けくれて

ことしもけふになりにけるかな

の感懷を深うするのだけれども、今更如何ともすることができぬ。たゞ人はこの歳暮の述懷と、年始に起す覺悟とを忘れぬやうにするのが、何より肝腎だと思ふ。

さてこの日は、貴賤いづれも神棚や佛壇を清め、家内を掃除し、蒸物煮物で勝手は大混雑、

今知れて摺小木せはし大晦日

(一)書名。十六卷。明の謝肇淛が撰したもの。
(二)瑯邪代醉編。明人張鼎思の著。全四十卷。
(三)俳諧歳時記栞草。五卷。藍亭青藍の著。嘉永四年出版。

爆竹　癘疫

は任柳の句であるが、この瀬戸際に、氣紛れな摺小木もあつたもの。

けふを大歳といふのは、五雜俎や代醉編に元日を小歳といふに對する名かと歳時記栞草に見え、俗には大晦日とも大三十日ともいふ。この夜を除夜または除夕といふが、除は新を以て舊に易へる義である。兼好法師の徒然草に、

門たゝき走り歩きて、何事にかあらんことごとしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方よりはさすがに音なくなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。

とあるのは、室町時代のさまであり去來の

年の夜や人に手足の十ばかり

といつたのは、今も全く同感である。

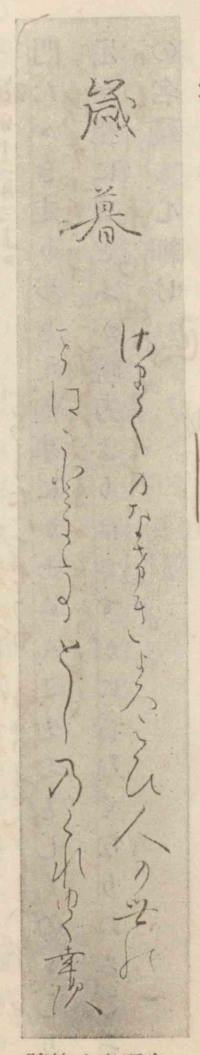
漢土では、この夜爆竹を行つて百鬼を驚かし、癘疫を驅る俗があ

煩悩

歳暮

さまざまのなげきよろこひ人の世のことはことにてとしのくれゆく　幸次

り、わが國では、十二時を相圖に、撞出す寺々の百八の鐘の音、霜夜を流れて哀に寂しく、煩悩消滅の響を刻むほどもなく、鷄も屢〻歌へば、寝つくともなき曉起に、まづ若水の釣瓶をはねて、心の底まで清々しう洗ひ清めて、めでたく元正の天に對ふのを常とする。



歳暮

ふるくのなかきよろこひ人のそよ
ふるとしとしのくれゆく幸次

鳥野幸次筆蹟

一九　今様三題

萬劫年ふる

萬劫年ふるかめやまの
苔むす岩屋に松生ひて、
松の木陰

したは泉の深ければ、

梢に鶴こそ遊ぶなれ。

松の木陰に立ちよれば、
梅が枝かざしにさしつれば、
春の雪こそふりかゝれ。

蓬萊山

蓬萊山には千歳ふる、
松の枝には鶴巣くひ、
巖のそばには龜遊ぶ。
萬歳千秋かさなれり。
千歳の緑ぞ身にはしむ。

二〇　羽衣——謠曲　その一

ワキ一聲「風早の、三穂の浦曲をこぐ船の、浦人さわぐ浪路かな。」

サシ「これは三保の松原に、白龍とまをす漁夫にて候。」ツレ「萬里の高山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨始めて晴れたりぬ。げに長閑なる時しもや、春のけしき松ばらの、浪たち續く朝霞、月ものこりの天の原、およびなき身のながめにも、心空なる景色かな。」歌「忘れめや、山路をわけて清見潟、遙かに三保の松原に、たちつれいざや通はん。風

虛空

むかふ、雲のうき浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし、浪は音なき朝なぎに、釣人おほき小舟かな。ワキ詞「われ三保の松原にあがり、浦の景色を詠むるところに、虛空に花ふり、音樂聞え、靈香四方に薰ずこれたゞごとと思はぬところに、これなる松に、美しき衣かゝれり。よりて見れば、色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存候。

シテ詞「なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ふぞ。ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候ふほどに、取りて歸候ふよ。シテ「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものに非ず。もとの如くにおき給へ。ワキ「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。シテ「悲しやな、羽衣なくては飛行の途も絶え、天上

に還らんこともかなふまじ。さりとては返したび給へ。ワキ「この御詞を聞くよりも、愈白龍力を得、もとよりこの身は心なき、天の羽衣取隱し、かなふまじとて立ちのけば、シテ「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ「地にまた住めば下界なり。シテ「とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ「白龍衣を返さねば、シテ「力及ばず、ワキ「せんかたも、地「涙の露の玉かづら、かざしの花もしをしをと、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

とやあらんかくやあらん

(一)一は頭上天花忽萎。二は天衣塵垢所著。三は腋下汗出。四は両目數瞬。五は不レ樂二本居一。

二一　羽衣

――謠曲　その二

シテ「天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路惑ひて行方知らずも。歌地「住馴れし、空にいつしか行く雲の、羨ましき景色かな。迦陵頻伽の音なれし、聲今更に僅かなる、雁が音の歸り行く、天路をきけば懷かしや。千鳥、かもめの沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまで懷

かしや。

ワキ詞「いかに申候。御姿を見奉れば、餘りに御いたはしく候ふほどに、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あらうれしやこなたへ賜はり候へ。ワキ「しばらく。承り及びたる天人の舞樂、たゞ今ここにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ「うれしや、さては天上に還らんことを得たり。このよろこびにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。たゞ今ここにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくてはかなふまじ。さりとてはまづ返し給へ。ワキ「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にやあがり給ふべき。シテ「いや、疑は人間にあり。天に僞なきものを。ワキ「あら耻づかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ「少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ「天の羽衣風に和し、シテ「雨にうるほふ花の袖、ワキ「一曲を奏で、シテ「舞ふとかや。地「東遊の駿

疑は人間にあり

霓裳羽衣の曲

いつぱ

玉斧の修理

(一)「春霞たなびきにけり久方の、月の桂も花や咲くらん。」(後撰集、紀貫之)

河舞、この時や始なるらん。

羽衣の能

地「それ久方の天といつぱ、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、久方の空とは名附けたり。シテ、サシ「然るに月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、地「白衣、黑衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ「我も數ある天少女、地「月のかつらの身をわけて、かりに束の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ「春霞(一)たなびきにけり久方の、月の桂も花や咲くらん。

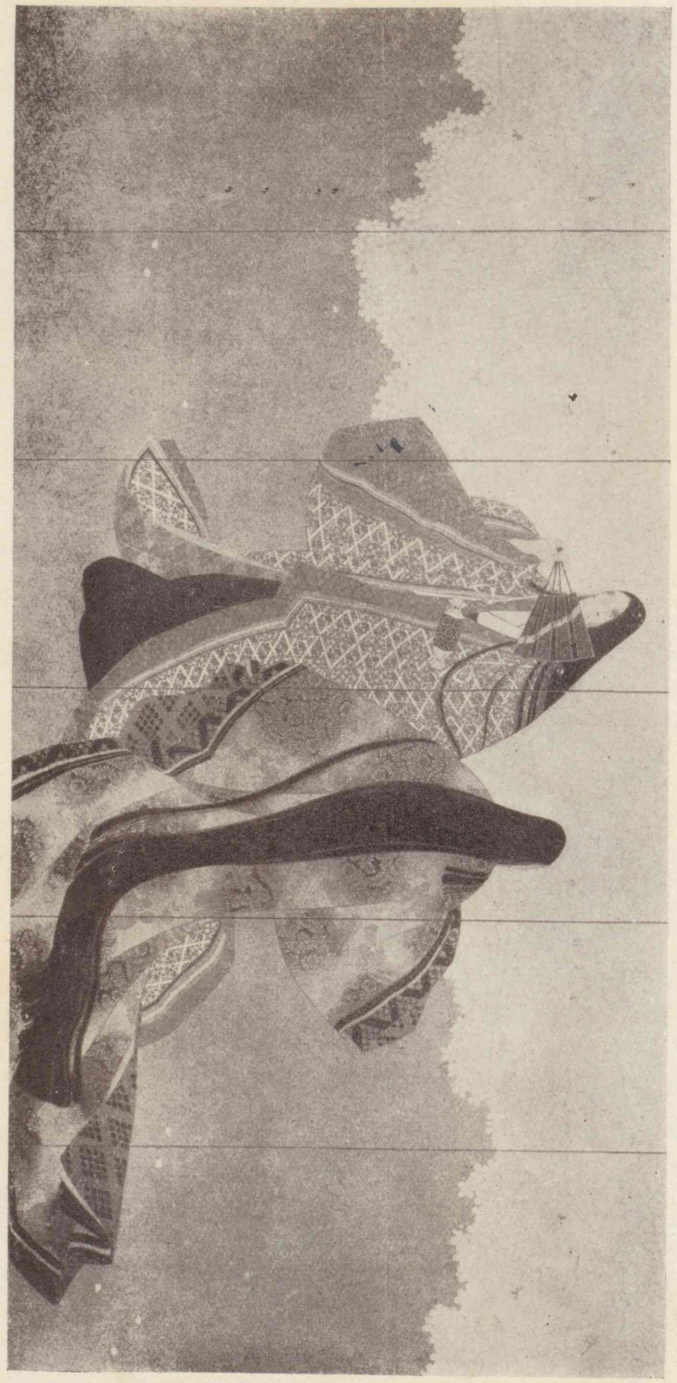
(一)「天つ風雲の通路吹きとぢよ、をとめの姿しばしとゞめん。」（古今集、良岑宗貞）

(二)「君が代は天の羽衣まれにきて、撫づとも盡きぬ巖なるらん。」（拾遺集、よみ人知らず。）

(三)「窪歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。」（大江定基の詩）

(四)「北は黄に南は青く東白、西くれなゐにそめいろの山。」（紫式部）本地

かや。おもしろや天ならで、ここも妙なり天つ風、雲の通路吹きとぢよ。少女の姿しばしとゞまりて、この松原の春の色を三保がさき、月清見潟、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も松風も、長閑なる浦のありさま。その上、天地は何を隔てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ「君が代は、天の羽衣稀にきて、地「撫づともつきぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへてかずかずの、笙、笛、琴、くご、孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は、蘇命路の山を寫して、緑は浪に浮島が、拂ふ嵐に花ふりて、げに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。シテ「南無歸命月天子、本地大勢至。地「東遊の舞の曲、シテ、ワキ「あるひは天つ乙女の裳、地「左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、なびくもかへすも舞の袖。舞「東遊のかずかずに、その名も月の色人は、三五夜中の空にまた、滿願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿



能　挿圖　第

の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さるほどに時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲のあしたか山や、富士の高嶺かすかになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。

(一)愛鷹山。

二二　小　謠

高砂

四海浪靜かにて、國も治る時つ風、(二)枝をならさぬ御代なれや。あひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても、ことも愚かやかかる代に、すめる民とて豐かなる、君の恵ぞ有難き。君の恵ぞ有難き。

熊野

四條五條の橋の上、老若、男女、貴賤、都鄙、いろめく花衣、袖をつらねて行末の、雲かと見えて八重一重、咲く九重の花盛、名におふ春の景色かな。景色かな。

(二)「太平之世。五日一風。十日一雨。風不レ鳴レ枝。雨不レ破レ塊。」(王充、論衡)

鶴　龜

庭の砂は金銀の、玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の扉、しぐこのゆきげた瑪瑙の橋、池の汀の鶴龜は、蓬萊山も餘所ならず、君の恵ぞ有難き。君の恵ぞ有難き。

二人靜

木の芽春雨ふるとても、なほ消え難きこの野邊の雪の下なる若菜をば、今幾日ありて摘ましし。春立つといふばかりにやみ吉野の、山も霞みて白雪の、消えし跡こそ道となれ。消えし跡こそ道となれ。

鞍馬天狗

花さかば、告げんといひし山里の、使は來たり馬に鞍、くらまの山のうず櫻、手折りしをりをしるべにて、興も迷はじ咲きつゞく、木蔭に並みゐて、いざいざ花をながめん。

竹生島

(一)「春日野の飛火の野守いで見よ今幾日ありて若菜つみてん。」(古今集、よみ人知らず)

(二)「春たつといふばかりにやみ吉野の山も霞みてけさは見ゆらん。」(古今集、壬生忠岑)

(三)「花さかば告げんといひし山人の音すなり馬にくらおけ。」(源頼政)

(一)綠樹影しづんで、魚木に上るけしきあり。月海上にうかんでは、兎も浪を走るか、おもしろの浦の景色や。

鉢木

松はもとより常磐にて、薪となるもことわりや。切りくべて今ぞ御垣守、衛士の焚く火はおためなり。よく寄りてあたり給へや。

二三　鶴の國　横山健堂

春にはすべからく鶴を語るべし。鶴に駕し洞簫を吹いて白日登天するは、人間の夢想境にあらずや。

わが輩鶴の國を觀て海峽の旅館に歸り、浴室に三助とせなかを流させつゝ鶴を語る。三助いはく、「生、本來北九州に生まる。少年時屢〻白鶴の高飛して過ぐるを望みしことあり。白一點碧空に映じて、梅花一片飛んで天に上るが如くなりき。」と。

(一)「綠樹影沈魚上木。清波月落兎奔浪。」(建長寺僧自休、竹生島詩)

(二)「御垣守衛士の焚く火の夜は燃えて、晝は消えつゝものをこそ思へ。」(詞花集、大中臣能宣)

洞簫

(三)馬關海峽。

五十年前には鶴の國到る所に在り、梅花開くところの村、鶴來らざるはなかりき。今鶴の國殊に少し。薩南の出水(一)と周防の八代村とに僅かに王國を存するのみ。然れども昔の鶴の國は、鶴、群を爲すに至らず。今の鶴の國は、群鶴百二三十羽に至る。恐らくは日本人開闢以來畫中の外には、未だかくの如き自然の大鶴群を見ざりしならん。

動物園の飼鶴は姿態ありて意氣乏し。鶴の清高無比なるは、その冲天の意氣ならずんばあらず。故に鶴は野鶴を第一とす。仙鶴といふは野鶴のことなり。

鶴は年々アラスカ地方(二)より遠く萬里の天を高飛して日本に來る。脚下には茫々たる大海横たはる。その翼を休ましむべき所なし。いかに健翼といふとへども、その勞想ふべし。鶴の脚に短冊を結びつくるは、鶴を愛する所以にあらず。

(一)薩摩國出水郡。

冲天の意氣

(二)Alaska. 北アリメカ最北の地方。

燒野の雉子夜の鶴

鶴はその雛を携へて萬里の飛翔をなす。雛鶴の翼疲るゝ時、母鶴はまさにその翼に抱きて飛ぶならん。母鶴もまた勞するかな。哀々の情、眞に想像するに餘りあり。

「燒野の雉子、夜の鶴。」の語あり。夜鶴の研究は鶴の國にても未だ分明ならず。わが輩は夜鶴よりも寧ろ飛鶴を想ふ。雛を携へてアラスカより渡來する時、翼の力よりも愛の力なり。

鶴の王國は周防熊毛郡八代村なり。島田驛より自動車程、僅かに一時間にして登るを得べし。驛に沿ひて島田川あり、驛前には東北に一帶の青山天を劃りて、恰も南畫の一大屏風を列ねたらんが如し。自動車は川を溯り、青山を穿ち、千山萬壑を攀ぢて登る。

白露下りて鶴は來り、梅花開き盡して鶴は歸る。嚴霜未だ隕ちずして田に落穗ありて、田にし或はどぢやうなど水田に餌の乏しからざる時鶴は群居す。天雪を飛ばす頃鶴は散居し、各餌を獵りて自

(鶴)

亂山
別乾坤

營す。故に鶴を見るは紅葉の頃を最も佳しとす。

八代村は鶴の王國たるのみにあらず、千禽悉くここに集りて、天下の禽園を成す。禽園の盟主は即ち鶴なり。かくの如き廣大なる「鳥の王國」は、現世に恐らくは唯一無二なるべし。

鶴の王國は事實に於て人生の樂園たらずんばあらず。花卉珍草茂生して、麗禽飛びめぐる。天地偏に愛らしきものに充たされて、毒蛇住まず。鶴未だよく人家に馴るゝに至らずと雖も、必ずしも人を恐れず。鶴の王國は海拔二千尺許、亂山高下して四周し、自ら天半に別乾坤を爲す。その地高寒なるを以て石楠花多し。鶴歸り去るの後、春晩より石楠花順次に咲誇り、千溪の杜鵑爭ひ鳴き、春より秋初に至るまで山鶯亂れ鳴く。

鶴の國は鶴居らずと雖も寂莫たらず。霜の頃鶴の一聲に千禽鳴りを靜むと雖も、鶴居らざる時は、夏の禽鳥悉く得意顔して鳴く。

白雲紅樹
偵兵
嘲嘵

鶴の繁榮の下に千禽皆繁榮す。村の太陽寺は鶴の一名所なり。寺僧の語るところを聞けば、雉子の二三羽が寺の庭に遊ぶを見るは珍しからず。十三羽の山鳥、寺の玄關に群集せしことありといふ。

白雲紅樹の青山を背景として、斜に段落をなせる水田の中に、五六十羽の鶴の群が展開せるを、正面僅かに一町許の距離より見上げたる時の雄々しく端麗崇嚴なる光景は、わが輩をして暫く我を忘れて見入らしめたり。

鶴群には必ず偵兵あり、全群皆餌を求むる時も、一羽は四方を觀望し、時々澄みて低き聲を發す。聲急なれば全群皆姿を整ふ。

村を遶りて皆青山なり。この日秋天晴れて暖かなれども、村を遶つて白雲あり。白雲は山の後より盛上りて、嶺上更に遠く奇峰を重ぬること、信州より千山を超えてアルプスを望むが如し。時に二三羽の飛鶴あり、聲雲に映じて嘲嘵として聞ゆれども、姿は青山に染

鐵騎

まりて見えず。

群鶴未だ起たず、意まづ改る。鳴聲恰も鐵騎の突出するが如く一鶴より響き、聲聲急に鶴鶴に響き、極めて急なる交響樂の一刹那を演出す。一音、一音に應じて、五六十羽の野鶴悉く首を擧げ、姿勢を正しくして昂然として動かず。

白雲を天幕とし、紅葉青山を舞臺として、天界の雄士五六十羽その仙衣を整へ、胸を張り威儀を正して一齊に正面に注目したる光景はいかに莊嚴を極めたる大觀兵式の威儀も壓倒せらるべく見ゆ。

神秘なる交響樂すでに終り、餘韻雲に殘りて鶴皆鳴かず、限りなき森嚴と緊張との絶頂に達したる一瞬間、沈默の夢の幕忽然として揚る。精練せられたる兵士の一隊が行進を始めんとして、上半身を前に乘出す一刹那の如く、無聲の號令の下に群鶴一樣に胸を出

聲樂

(酣)

し翼を張ると見るや、憂然として長鳴し、百二三十の雄々しき翼の羽ばたきの入亂れたる音に、憂々たる急鳴を交へて、思ひがけなき交響樂を奏しつゝ、大空に向かつて舞上る。かくの如き交響樂、人間未だ夢想せず。

無數の月卿雲客その羽衣を飜し、天成の長き肉笛よりほとばしる聲樂の美しき急調子につれて、算を亂して大空に舞ひ舞うて廣がる。天にゑがけるが如き舞踏の群は、廣がりたるまゝに散らず、入亂れつゝ水平的に群れて行き、舞上り、舞下り、或は沈んで低く村落の森を遶り、或は高く登りて白雲を超えて青天に浮かび出づ。

天界の秋興たけなはなるらん、大輪郭をゑがきて大空を舞ひあるきたる群鶴は、興盡くるところを知らざるべし。森を超え、邱を超え、鳴聲を地上に送りつゝ、その舞うて行きしところは見えず。わが輩は天上の舞踏を見たり。この時夢にはあらず。

精舍　寺。

(一)名は宗易。利休はその號。千家流茶道の祖。堺の人。豐臣秀吉に仕へ天正十九年(一二五一年)死を賜はつた。年七十一。

(二)狩野元信。狩野家第二世。足利氏に仕へ法眼となつた。法眼とはもと僧位である。永祿二年(一二一九年)歿。年八十四。

寓居　かりずまひ。

自修文

二四　繪に魂を入るゝこと

柳澤淇園

或人余が許に來りて、繪に魂を入るゝと申すことは、いかやうなることをしてゑがきはべらば、魂は入り候ふことぞ。と問ふ。余答へていふ、「すべて繪には限らず、何事にても實心をこめてさへいたさば、魂の入らずといふものあるべからず。他のことはいざ知らず、繪に魂の入りたりと思ふは、諸國にて種々名畫も多かるうちに、わが見し泉州堺に一國寺といふ精舍あり。この寺は、千の利休もしばらく居られし時、物好を盡して、庭園、座敷、五間ほども あり。一間には檜一本をゑがけり。一間には臥したる鶴二十五羽許をゑがきてあり。いづれも彩色ありて、古法眼元信の筆といひ傳へたり。そのかみこの繪をかける畫師、この寺に寓居することみとせ三年許のうちに、何ひとつゑがきたることなく、碁を好みて、たゞ

一家をなす　一流を大成する。

絶えて　決して。全く。

そと　そつと。しづかに。

それのみ日毎の樂みとして、あるはここかしこ遊び歩くに、はやく三年を經たり。一たびだに筆を執りしこともなきは、いかにも心得ざるものかなと思ひて、或時、住持の申されけるは『その許畫をもて一家をなせりといひながら、筆を執りたることもなく、碁にのみ年月を過さるゝはいかにや。我衣食の費をいとふにはあらねど、何處へなりとも遊び給へ。愚老も所用ありて京へ上り、事によりては一年も在京せんもはかり難し。』といふに、かの畫師聞きて、『それこそいと名殘惜しきことに候へ。さあらば年來の恩謝に、何か少しの畫をのこしまゐらすべし。』とて、心がまへのみにて、また四五日ほど經るに、住持は何をゑがくと見たくて待てども、絶えて筆を執らず。或夜、小坊主の、住持が居間に夜ふけて來り、ひそかに申すやう、『かしこに行き給ひて、そとのぞきて畫師のありさまを見給へ。』とさゝやきけるに、やがて小坊主にいざなはれて、畫師が居間をうかゞふに、明障子の腰板に身を寄せて、さまざ

まだき　朝早く。未明。

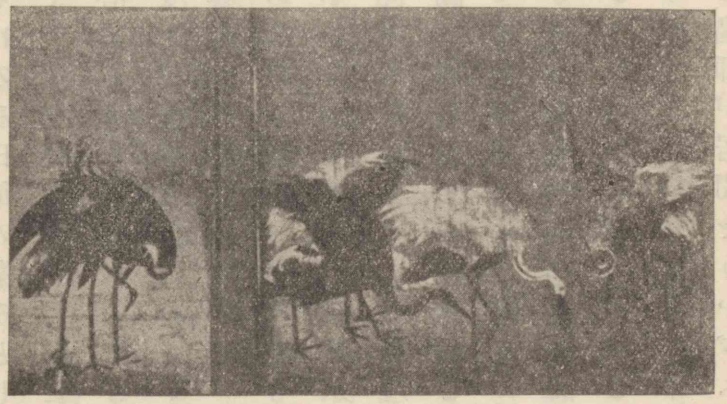
不凡　ふつうでない。なみでない。

丹青　丹はあか、青はあをで、もとはゑのぐや彩色のこと。轉じてゑのこと。

さあるに　然るに。

夜もすがら　夜ぢゆう。終夜。

とやせん云々　かうしようかあゝしようかなど。

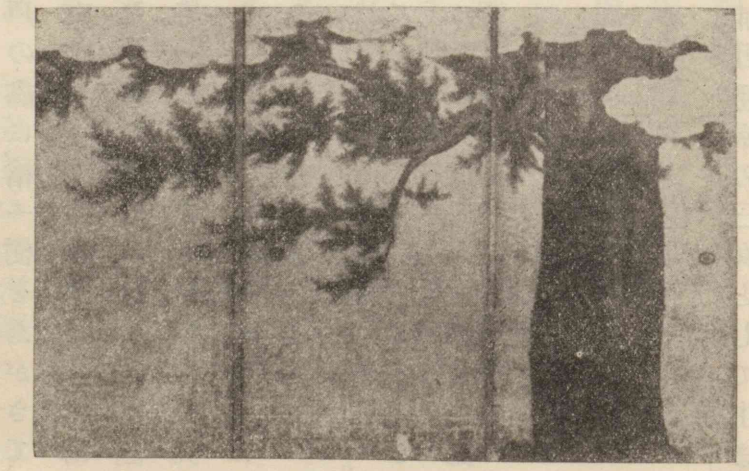


一國寺の「鶴」

まの姿をかへつゝ寝起するありさまを見るより、小坊主を引寄せ、來よかし、のぞくべからず。早く臥せよ。』と。て、その身も寝間に入りたり。あくれば畫師まだきに起出で、一間なる障子にゑがきたるを見れば、皆臥したる鶴なり。畫勢不凡にして、丹青の妙いふべからず。さあるに、またの夜はいかにとうかゞふに、前の如く夜もすがら寝ずして、明けなばかくやゑがかん、とやせんかくやあらましなど、ひとりつぶやきつゝ臥しぬれば、住持も知らぬ顔にてすぐししが、十日あまりにして、その鶴およそ二十

思ひかまへる　考へくふうする。

四五羽をゑがけり。またも夜ふけてのぞき見るに、こたびは肘をはり、足をのべ、手を口にあてつゝ、鶴のふしたるさまを見て臥しけるに、夜明けてかの畫師が許に住持來りて、『けふゑがき給はん鶴の姿は、かやうにや候ひぬらん。』と、よべのぞき見たる姿のさまして見せければ、うち驚き、『禪師にはわがゑがかんと思ひかまへし心を、はやくもさとり給ふはいかに知り給へるにか。』と問ふに、『いやとよ。昨夜そのもとのやうすを、そとうかゞひて知りたり。』といへば、畫師それ



一國寺の「檜」

杉戸　杉の材で造つた戸。

下向　都からぬなかへ行くこと。もと京都は都であつたのでいふ。

(一)光格天皇の御代、三年は紀元二四六六年。

よりして、二枚はゑがかずして、杉戸の畫に、檜一樹をゑがきて出立ちぬとぞ。この檜をゑがきし後、東國へ下向のをりから、東海道箱根の山中にて、檜の枝の心にかなひたるがありければ、東國へは下らずして、ふたたび泉州一國寺へたちこえしかば、住持見て大きに驚き、『東國へ行き給ふと聞きしに、またもや來られしはいかなることにか。』といふに、『さきにゑがきし檜の枝、一枝足らぬところあり。箱根にてその意を得たれば、わざわざ立ちもどりたり。』とて、一枝を書きそへ、暇乞して出でさりぬとぞ。畫に魂を入るゝといへるは、かゝるたぐひと思ひぬ。』といへば、或人も感じて歸りぬ。

—雲萍雜誌—

二五　野村望東尼

佐々木信綱

望東尼は筑前福岡の人、(一)文化三年浦野勝幸の三女として生まる。

時勢日に非　慷慨

(一)名は忍向京都清水寺の僧、安政五年(一八五八年)十一月西郷隆盛と俱に海に投じて死んだ。年四十六。

(二)福岡藩士。勤王を唱へて幕吏に捕へられ、元治元年(一八六四年)七月刑せられた。年四十三、或は三十九。

(三)山口藩士。吉田松陰の弟子。慶應三年(一八六七年)歿年二十九。

(四)三條實美。明治十八年まで太政大臣、明治後内大臣。二十四年薨。

容麗しく、歌をよくし、書に巧に、裁縫、刺繍の業にもたけたりしが、同藩の士野村貞貫の詩歌に嗜深く、正義廉直の士なるを聞きて、先妻の子三子あるをも厭はず、野村氏に嫁ぎてよくその家を治め、先妻の子をおほし立て、一家和合、春風の吹くが如くならしめぬ。後、家を長男に讓りて、平尾村の邊、靜かなる境に世を避けしに、安政の四年といふに、夫世を去りしかば、剃髪して佛の道に入り、その名もと女を望東尼と改めぬ。當時幕府の專横甚だしく、時勢の日に非なるを見るにつけ慷慨の念堪難く、密に交を志士に結び、あるはその山莊を會合の所とし、あるは同志をかくまひなどして、眞心を盡しぬ。されば、かの僧月照(一)が薩摩へ下りし時はここに宿らしめ、また平野國臣(二)、高杉晉作(三)等をも潛ましめ、その危きを救ひて、ねもごろにいたはり、また太宰府に幽閉せられし三條公(四)に謁しなどしたり。かゝることと積り積りしかば、終に罪を得、捕はれて浪風荒き玄海灘の一孤島、

歌文の錦

陸地を距る五里冲なる姫島の牢獄にこめられぬ。そこに在ること二年。身を容るべきは、僅かに四疊の荒板敷、めぐりには松の檻木を組み、荒格子を構へて、海見ゆる南の方にのみ小さき窓ある牢の中に、かよわき老の身の押しこめられて、暑さ寒さを忍びゐしに、かの高杉晉作に援け出されて、長門に隱れしかど、老軀長く堪ふるを得ず、維新の大業成るを見ずして、慶應三年十一月六日、年六十二歳にて病の爲に空しくなりぬ。女ながらも皇國のおん爲、大君のおん爲に心を碎き、あるは志士の病をとぶらひて慰め勵まし、あるは同志の間に入りて互に志を通ぜしめしなど、その心づかひなみなみならず、誠にその一家の良妻賢母なりしが如く、陰に維新の大業を扶けし烈婦の一人なりき。その一生の閲歴かくの如く、さながら一篇の詩なり。しかも忠誠燃ゆるが如き眞心を緯とし、感じ易き優しき女心を經として、優れたる才をもて、その織りなしつる歌文の錦、い

句々皆血涙の跡をとむ

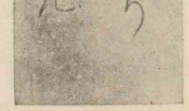
はるのことみしかき物はなかりけりいつれのかなりとしとおもひし　望東尼

(一)福岡の人。歌人。文久年中大阪に出て歌を教へた。

堂奥に達す

かで世の常なるべき。

彼が歌は、或は悲憤慷慨、憂國の至情あふれて、句々皆血涙の跡をとむるあり。或は優麗閑雅やさしき鶯の初聲を聞くが如きあり。しかもこの両面を相むかへ見て、始めてその優れたる人となりを知り、その歌のまことの趣をも解しつべく、猛く雄々しきが中にも、なよ竹のたわみながらに強きところあるを知り得べし。かつやその歌の調の清新なる、その觀察の奇警なる、またよみざまの巧にして手のきゝたる、その修辭に、用語に、自由輕妙にして、その師大隈言道(一)さながらなるあり。もとより生具の天才ならんも、またよく師を學びて堂奥に達せしものにあらざらんや。以てその修養の淺からざ



野村望東尼筆蹟

りしを知りぬべし。而してその歌の悲憤慷慨の一面は、これ彼が境遇性情より得來りしところにして、言道が和歌には見えざるところなり。

—歌學論叢—

二六　心の花

小野小町

(一)色みえでうつろふものは世の中の
　ひとの心の花にぞありける

小野千古母

(二)小野の千古が陸奥の介にまかりける時

(三)たらちねの親のまもりと相添ふる
　心ばかりはせきなとゞめそ

紀貫之女

(一)古今和歌集に出てゐる。
(二)不詳。
(三)古今和歌集に出てゐる。
(四)紀内侍。

赤染衛門

(一)勅なればいともかしこし鶯の
　やどはと問はばいかがこたへん

紫式部

(二)ふめば惜しふまでは行かん方もなし
　こゝろづくしの山ざくらかな

周防内侍

(三)ありなしや人こそ人といはずとも
　みづから身をゝ思ひすつべき

(四)家を人にはなちて立つとて、柱に書きつけはべりける

(五)住みわびて我さへのきのしのぶ草
　しのぶかたがたしげき宿かな

小式部内侍失せて後、上東門院より年頃賜

(一)大鏡に出てゐる。
(二)千載和歌集に出てゐる。
(三)續古今和歌集に出てゐる。
(四)周防守平繼仲の女。
(五)金葉和歌集に出てゐる。

はりけるきぬを、亡きあとにもつかはしたりけるに、小式部内侍とかきつけられたるを見て詠める　和泉式部

もろともに苔の下にはくちずして
うづもれぬ名を見るぞ悲しき　(一)

病限りと見えたる時　小式部内侍　(二)

いかにせんゆくべき方もおもほえず
親にさきだつ道を知らねば

松風入夜琴　齋宮女御　(三)

ことの音に峰の松風かよふらし
いづれのをより調べそめけん　(四)

相模　(五)

みわたせば波のしがらみかけてけり　(六)

(一) 金葉和歌集に出てゐる。
(二) 和泉式部の女。
(三) 名は徽子。重明親王の女。伊勢の齋宮になり、後に村上天皇の女御となつた。
(四) 拾遺和歌集に出てゐる。
(五) 源頼光の女。相模守大江公資の妻。
(六) 後拾遺和歌集に出てゐる。

卯の花咲ける玉川のさと　式子内親王

山深み春とも知らぬ松の戸に
たえだえかゝる雪の玉みづ　(一)

末とほき息長川を見わたせば　鵜殿餘野子　(二)

かすみをかづく春のにほどり　(三)

わがせこがときあらひ衣ぬはなくに
をぎの葉そよぎ秋風ぞ吹く　土岐筑波子　(四)

土岐筑波子筆蹟

(一) 新古今和歌集に出てゐる。
(二) 歌人。紀伊侯夫人に仕へて瀬川と稱した。賀茂眞淵の門人。
(三) 滋賀縣坂田郡を流れる川。
山かせやさそひきぬらん淺ちふの
にはにみそむるけさのしら雪　茂子
(四) 歌人。名は茂子。賀茂眞淵の門人。

(一)松陰の長妹千代子。安政六年四月十三日松陰は萩の野山の獄中でこの書を認めた。

精進潔齋

二七　妹に諭す

吉田松陰

この間は御文下され、觀音様の御洗米、三日の精進にて頂き候ふやうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進、潔齋などは、隨分心のかたまり候ふものにて、宜しきことと存候ふにつき、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候ひて、酒肴など一向食べ申さず候。その間一度靈神様御祭の物頂戴いたし候ふばかりにござ候。まして三日の精進はさまでむづかしきことにもこれなく、御深切のことに候へば、相果したく存候ふところ、當所にてあたりまへの精進の外にまた精進と申候ひては、連中または番人ども、何故と怪しみ尋ね申すべく候ふにつき、それをそれと相答へ候ふこと面倒に存候ふ故、八日は幸ひ精進日なれば、その日一日に頂き申候。抑、觀音様信仰せよとのことは、定めし禍をよけ候ふ爲なるべく、

首の座に直る

大乘小乘
下根上根
ひたもの

これは大いに論のあることに候へば、委細申し進ずべく候。法華經第二十五の卷、普門品と申すに、觀音力と申すこと高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候はば、繩目に懸り候ひても、忽ちぶつぶつと繩目が切れ、人屋に捕はれ候ひても、忽ち錠、鍵が外れ、また首の座に直り候ひても、忽ち刀が千々に折るゝなど申してこれあり候。これは拙者江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれより有難きことはなしとて信仰するも、無理はなく候。

さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘、小乘と二つに分ちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乘にては、觀音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむることにござ候。これは大いに信を起さする爲なり。信を起すとは、一心に有難いことぢやとのみ思ひこみ、餘念他慮なきこと

退轉

不退轉

生老病死

にて、一心不亂と申すもこのことなり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨みても、ちつとも頓着なく、繼目も、人屋も、首の座も平氣になられ候ふ故、世の中に、いかに難題苦患のくるとも、それに退轉して、不忠、不孝、無禮、無道等仕る氣遣はなし。されど初より凡夫に、一心不亂の、不退轉のと申し聞かせても、少しも耳に入らぬもの故、かりに觀音樣をこしらへて信を起させ候ふ敎にござ候。これを方便とも申候。

さてまた大乘と申す方にては、出世法と申すことが肝要にござ候。出世と申しても、立身出世など申すことにはござなく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひしところ、若き時より感の強き人にて、老人を見ては、わが身も行くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては、わが身も行くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲みを發し、生老病死がこの世の習な

れば、是非にこの世を出ねばすまずと志を立てて、年二十五の時、位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るゝ修業をしに參られ候。さ

松陰とその筆蹟

候ひて三十出山とて、僅か五年の間に生老病死を免るゝことを悟り、生まれもせねば老いもせず、病みも死にもせぬことを悟つて出で來て、それより世の人を敎化せられたり。これが即ち出世法なり。

塞翁が馬

故に出世せずては濟世のできぬと申すもこのことなり。濟世といふは、即ちこの世の人を濟度することにござ候。

さてその死なずと申すは、近く申さば、釋迦の、孔子のと申す御方は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすれば、有難がりもし、恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も、人屋も、首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか、大石良雄とか申す人々は、刃物に身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀の千々に折れたる證據なり。

さてまた「禍福は繩の如し。」といふことを御悟りなるが宜しく候。禍は福の種、福は禍の種に候。人間萬事塞翁が馬にござ候。拙者など人屋にて死ぬることに候へば、禍のやうなものに候へども、また一方には學問もでき、己の爲、人の爲、後の世へも殘り、かつがつ死なぬ人々の仲間入りもでき候へば、福この上もなきことに候。人屋を出

ふざま

で候はば、またいかなる禍の來んも知れ申さず候。勿論その禍の中には福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし。なんの効驗もなきことに、觀音に賴みて福を求むるやうのことは、必ず必ず無益に存候。されば拙者の氣遣に、觀音樣を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂は苦の種、福は禍の本。」と申すことを、とくと申し聞かする方が肝要なり。

なほまた一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあり。兄弟の中一人にても、ふざまのわろき人あれば、あとの兄弟も自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者は、兄弟の代りにこの世の禍を受合ふ故、兄弟中は拙者の代りに、父母樣へ孝行してくるゝがよし。さればつゞまるところ兄弟中皆よくなりて、はては父母樣の御仕合、また子供が見習ひ候へば、子孫の爲これほどめでたきことはなきにあらずや。よくよく御勘辨候ひ

て、(一)小田村、(二)久坂なんどへもこの文御見せあるべし。佛法信仰はよきことなれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりとをりをり御見候へかし。心學本に、

のどけさよ願なき身の神まうで

神へ願ふよりは、身に行ふが宜しく候。

——俗簡襍輯——

(一)小田村素太郎。松陰の妹壽子の婿。
(二)久坂玄瑞。同妹美和子の婿。
(三)藤原不比等。元正天皇から追贈された號。
(四)岩代國信夫郡信夫郷の庄司。

二八　主從の別

十六人思ひ思ひに落掛るところに、音に聞えたる剛のものあり。先祖を詳しくたづぬるに、鎌足の大臣の御末、(三)淡海公の後胤、佐藤のりたかが孫、(四)信夫の佐藤庄司が二男、四郎兵衛藤原の忠信といふ侍なり。人も多く候ふに、御前に進み出で、雪の上に跪きて申しけるは、「君は御心安く落ちさせ給へ候へ。忠信はこれに留り候うて、麓の大衆を待ちえて、一方の防矢仕り、一まづ落し參らせ候はばや。」と申しければ、「尤も志はうれしけれども、御邊の兄繼信は、屋島の軍の時義經が爲に命を捨て、(一)能登殿の矢先に中りて失せしかども、これまで御邊のつき給ひたれば、繼信も兄弟ながら未だある心地こそしつれ。年の内は思へばいくほどもなし。人も命あり、我も長らへたらば、(二)明年の睦月の末二月初には陸奥へ下らんずれば、御邊も下りて(三)秀衡をも見よかし。また信夫の里に留め置きし妻子をも、今一度見給へかし。」と仰せられければ、「さ承り候ひぬ。(四)治承二年の秋の比、陸奥を罷り出で候ひし時も、けふよりして君に命を奉りて、名を後代にあげよ。矢にも中り死しけると聞かば、孝養は秀衡が忠をいたすべし。

義經の木像

(一)能登守平教經。
(二)文治二年（一八四六年）
(三)藤原秀衡。義經を成人させた人。
(四)高倉天皇の御代。二年は紀元一八三八年。

けふは人の上あすはわが身上

綸言

玄冬素雪
九夏三伏

高名たびたびに及ばば、勳功は君の御計らひとこそ申し含められしか。命を生きて故郷へ歸れと申したることも候はず。信夫に留め候ひし母一人候ふも、その時を最後とばかりこそ申しきりて候ひしか。弓矢とる身の習、けふは人の上、あすはわが身の上、皆かくこそ候はめ。君こそ御心弱くわたらせ給ひ候ふとも、人々それよきやうに申させ給ひ候へや。」とぞ申しける。武藏坊これを聞きて申しけるは、「弓矢取るものの言葉は綸言に同じ。言葉に出しつることを飜すことは候はじ。たゞ心安く御暇を賜はりたし。」とぞ申しける。判官暫くものをも仰せられざりけるが、やゝありて、「惜しむともかなふまじ。さらば心に任せよ。」とぞ仰せられける。忠信承りてうれしく思ひて、たゞ一人吉野の奥にぞ留りける。されば夕べには月星の光を戴き、朝には教訓の霧を拂ひ、玄冬素雪の冬の夜も、九夏三伏の夏の旦にも、日夜朝暮片時も離れ奉らず仕へまつりし御主の御名殘も今

(一)桓武天皇の朝の武將。弘仁二年(一四七年)歿。年五十一四。

(二)醍醐天皇の朝の武將。下野高座山の賊を討つて功があつた。

(三)同國伊達郡に嫁した娘。

ばかりなりければ、日比は坂上の田村麿、(一)藤原の利仁(二)にも劣らじと思ひしが、さすがに今は心細くぞ思ひける。十六人の人々も、面々に暇乞して、前後不覺になりにけり。

また判官、忠信を近く召して、太刀と鎧とを賜ひ、「故郷に思ひおくことはなきか。」と仰せられければ、「我も人も衆生界の習にて、などか故郷のことを思はざらん。國を出でし時、三歳になり候ふを一人留め置きて候ひしぞ。かのものに心付きて、父はいづくにやらんと尋ね候ふべきなれば、聞かまほしく候。平泉出でし時、君ははや御立ち候ひしかば、鳥の啼きて通るやうに、信夫をうち通り候ひしに、母の所に立寄り、暇乞ひ候ひしかば、齡衰へて二人の子供の袖にすがりて、悲しみ候ひしこと、今のやうに覺え候。『老の末になりて我ばかりものを思ふ、子供に縁のなき身なりけり。』信夫の庄司に過ぎわかれ、またまた近付きて不便にあたられし伊達(三)の娘にも過ぎわかれ、一

方ならぬ歎なれども、わ殿ばらを成人せさせて、一所にこそなければ、母にてさぶらふもの急ぎ平泉へ参り、『忠信はいづくに候ふぞ。』と申さば、繼信は屋島、忠信は吉野にて討たれけりと承りて、いかばかり歎き候はんずらん。それこそ罪深く覺えて候へ。君の御下り候うて、御心安くわたらせおはしまし候はば、繼信、忠信が孝養は候はずとも、母一人不便の仰にこそあづかりたく候へ。』と申しもはてず、袖を顔に押當てて泣きければ、判官も涙を流し給ふ。十六人の人々も、皆鎧の袖をぞぬらしける。

——義經記——

二九　文化生活の出發點　三宅雪嶺

文化生活の出發點は、眞善美を指して進まうと心掛けるところにある。眞と善と美と三つ組を形作り、各獨立しながら相接觸して、よくこれを調諸均齊し、少しも矛盾せぬやうにするのが完全な生

調諸均齊

方ならぬ歎なれども、わ殿ばらを成人せさせて、一所にこそなければ、母にてさぶらふもの急ぎ平泉へ参り、『忠信はいづくに候ふぞ。』と申さば、繼信は屋島、忠信は吉野にて討たれけりと承りて、いかばかり歎き候はんずらん。それこそ罪深く覺えて候へ。君の御下り候うて、御心安くわたらせおはしまし候はば、繼信、忠信が孝養は候はずとも、母一人不便の仰にこそあづかりたく候へ。』と申しもはてず、袖を顔に押當てて泣きければ、判官も涙を流し給ふ。十六人の人々も、皆鎧の袖をぞぬらしける。

——義經記——

血をあへす

(一)壽永三年のこと。

要諦

達德

活である。

眞善美は果して完全な要諦であるか。いかにしてこれを證明するかといふに、これは人類が幾代となく經驗を積み知識を練つて、おのづと知りえたのであつて、今は誰でも熟知してゐる。眞善美といふ名稱はギリシャ人の創唱だといふが、ギリシャばかりが發明の榮譽を荷なふわけにはいかぬ。同樣なことはどこにもあるもので、言葉に表さぬにしても、事實には表してゐる。わが三種の神器は特にこれに眞善美を配當したのではないが、自ら相當るところがある。即ち鏡は眞、劍は善、玉は美を表す。鏡がものそのものをありのまゝに映して、少しの間違をも許さぬのは眞を意味する。劍が、殺人劍といひ、活人劍といつて、惡人を除き善人を救ふのは善を意味する。玉が何等の必要もないやうで、しかも見て飽くことのないのは美を意味する。支那で智仁勇を達德とし、日本で智を鏡に當て、仁を

玉に當て、勇を劍に當てたことがある。普通に世間で眞善美を分けず、またこれを意識せぬやうでも、一たび聞けば、なん人もこれを了解するのは、人の頭腦がかうでき上つてゐるからである。

眞善美の語の起源は數千年前にある。そこで隨分舊いものとして、今日これを差措いて顧ぬものが少くない。科學者は實驗に照らして眞實を知らうとし、他に何事があつても振返つて見ず、偶〻振返れば輕蔑の目を以て見る。宗教家や道德家は、昔から善惡正邪と定まつたところから見て、過去の形式に當てはまらねば、人間あつかひにすべきでないやうに心得てゐる。藝術に從事するものは、眞といひ、善といひ、勝手に取極めたことであつて、身を窮屈にするよりも、美に憧れ、美的生活を送る方が生きがひがあると稱する。これは時代により土地によつて相違があるけれども、古來幾度繰返されてゐるか知れぬ。繰返される中に多少進歩はするものの、一部を固

偶發

（蹇）

執して他を慮らねば、己自らを不具にする嫌がある。遺傳または偶發で不具になることもあるが、多數は身體的にも、精神的にも、立派に發育する可能性を備へてゐる。それが周圍の事情で不具になり、恰も盲と啞とゐざりとが互に相罵るやうな滑稽を演ずるのは、深く戒むべきことではないか。社會が進むと共に分業もまた進み、なんでも專門に分れる以上、互に相分れるのが進歩だと考へるのは、耳を破つて目の見えるやうにし、目を潰して耳の聞えるやうにしようとするのに似てゐる。聾で繪畫に長ずるのがあり、盲で音樂に長ずるのがあるけれども、それで畫家が聾にならねばならぬといふこともなく、音樂家が盲にならねばならぬわけもない。ヘレン・ケラー[一]が盲啞で人並以上の能力があるからとて、人々が盲啞にならうとすれば、全く瘋癲の伍伴に入る。眞善美が別々にあるべきものでないことは、五官の別々にあるべきでないと同樣である。但し、人に

〔一〕Helen Keller. 西暦一八八〇年アメリカ合衆國に生まれ、生後二十個月で病の爲盲啞となつた。外國語、歷史、音樂などに通じてゐる。

伍伴

よつて、三つが同じやうに備らず、厚薄の別のあるのは免れぬ。

眞善美をそろへて進むのは、文化生活に大切なことで、食物でも、衣服でも、家屋でも、公共生活でも、成るべく三拍子そろはせたいものである。然らば食物になんの眞善美があるかといふに、生理的、衛生的に法則を守るのは眞を求めるのである。しかし、單に

ヘレン・ケラー

それだけでは濟まぬ。肉類をとるにも、慘酷な方法を用ひて捕へまいとする。これは善を求めるのである。また食物は料理して美味を增すばかりでなく、體裁も餘り見苦しくてはならぬ。これは美を求めるのである。そして、眞は善美を助け、善は眞美を助け、美は眞善を助け、互に相助長するところがある。衣服や家屋についても同樣である。堅實も質素も結構である。しかし一概に華美を

排斥すべきでない。堅實、質素と撞着せぬ範圍に於てすべきである。

荻野獨園[一]が弟子にいつた「釋迦は今正に兜率天[二]で頻りに勉強して居られる。我等はなんとして勉強せずに居られようぞ。」と。普通ならば、釋迦は理想に達し進歩を窮めたとするところを、獨園はそれと違ひ、釋迦も現に勉強して居るとした。そこに一隻眼があると認められる。長い間には進歩があり、停滯があり、退歩もあるが、大體に於て、人生は進歩を續け、いつまでも進歩の途にある。正しく、清く、麗しく、慈みのある生活を送らうと思ひ立つのが文化生活に入る第一歩である。そして、いやが上にも充實し、發展し、完全に達し、圓滿に到らうと絶えず進むところに、人生の實相が現れる。眞善美を指して進めば、いつ死んでも、それだけ適當に生活し得たのである。

(一)明治の禪僧。
(二)須彌山の頂上にあるといふ天。

一隻眼

自修文

三〇　精確な知識と數量的要素

渡邊英一[一]

知識を精確にする爲に必要な觀察上の用意は、できるだけ數量的要素を加へるといふことです。例へば、自宅から學校まで「餘り遠くない。」といふよりも、「凡そ三町くらゐ。」とか、「五町くらゐ。」とか、「そんなに時間がかゝらない。」といふよりも、「普通の足取で五分くらゐ。」とか「十分くらゐ。」とか、方角なら「東」とか「東南」とか「南」とかいふ風に見て置くことです。わが國民には科學的頭腦が乏しいといはれますが、その科學的頭腦といふことの要件の一つは、數量の考のはいることにあるのです。

或人がドイツに留學してゐた時、下宿してゐた家の女中に、一度日本風の米飯を炊くことを教へたところが、その後いつも同じやうに上手に炊けるので、どうしてさううまく炊けるのかと聞いて見たら、「水の分量や煮る時間などを計つて書いて置いて、あとはその通りにするからです。」と答へたので、その人は大變感

(一)日本女子大學教授。

數量的要素云云　數や量を必要な基とすること。

科學的頭腦　秩序あり系統だてられた事實について述べまたは證明する判斷力。

能率　一定時にできる仕事の割合。

口傳　くちづたへ。

濫用される　やたらに用ひられる。

心したさうです。教育が普及してゐるからとはいふものの、わが國では高等女學校を卒業した主婦でも、なかなかさほど精確なことはいたしません。教育の高い低いよりも、その教育のし方或は頭の働方です。

消費を節約して、しかも生活の能率をあげるには、どうしても科學的知識を用ひる外に途はありません。私どもの生活の中で、科學的知識の殊に最も必要なのは臺所です。ところがわが國の臺所ほど、科學的知識のはいらない所はないでせう。すべてが漠然たる習慣と、いい加減の目分量とですから、ずる人はその時その時に當つて、一々口傳實習をしなくてはならず、しかもできがむらで、一定の所要効果を見ることができません。これでは節約のしやうも、能率のあげやうもないのです。

近來文化生活といふ言葉が濫用されて、何か少し新しいことをすると、すぐ文化生活といふ名をつけます。まことにばかげたことですが、しかし、生活の方法を學術的知識によつて定めることをも、文化生活と名づけてよろしいなら、わが國大多數の家庭生活は、文化生活と反對の自然生活、或は野蠻生活と名づけられる狀態にあるとしなければなりません。そして、文化生活が採用さるべきものであり、野蠻生活が排斥さるべきものであるならば、私どもはできるだけ早く家庭生活を科學化して、勞力、時間、材料を節約すると同時に、健康上、修養上、もつと大いに有効なものとすべきでせう。

決算　終末の計算。

その第一着手は、まづ臺所に數量的、計算的の方法を加へることです。これは豫算決算を精確にして、生活の經濟的方針を定めるだけの爲にも必要です。たちの惡い商人にばかにされないだけの爲にも必要です。

臺所に科學的方法を加へることは、單に目前の實際生活を有効に正確にするばかりではない、一面には臺所の仕事が同時に

學術的研究となつて、或は學術論文を草する材料も得られませう。少し以前には、高等教育を受けたものが、臺所のことで暇つぶしをするのは勿體ないなどといふ婦人がありましたが、これは臺所の仕事のし方を知らなかつたからです。少しの科學的方法を加へる注意があれば、臺所を極めて有益な、おもしろい實驗室、研究室とすることができるはずで、また他面には、發明發見の端緒をとらへる機會も、從來の因襲的方法に安住してゐるより、遙かに多いことであらうと思はれます。

——眞と善との生活——(一)

端緒 いとぐち。
因襲的方法に安住する ありきたりの方法に甘じてゐる。
(一)渡邊英一著。大正十四年東京内外教育社發行。

三一　「途上所見」

尾崎紅葉

拜呈。本日の上天氣、端居春心の醉ふに堪へず、加ふるに數日來散歩を廢し居候ふこととて、遊意頻りに動き候ふに、一昨日持歸り候ふ手提カメラ(二)の未だ一着手をも經ざるありて、かたがたこの日をあだに過し難く、或は課題「途上所見」の好圖樣を得ることもあらんかと、遽に思ひ立ちて、早稲田邊(一)までと志し候ふは、午後一時頃にこれあり候。

端居春心の醉ふに堪へず 遊意
(一)Camera.
あだに過す
(一)東京市牛込區。
(二)同區。
(三)小石川區。

尾崎紅葉

鶴卷町(二)より田圃に出づれば、すぐに一面のはんの木林にて、このわたり冬の朝日の最もあはれなる所。木隱れて獨り畑打つ男ゐたり。前年小生が銃獵を始め候ふ日、下駄掛にて百舌、ひよなどをおひ廻し候ふもこの邊にて、その頃所持の二十八番形村田銃とその手腕と、今日の手提カメラとその伎倆とは、なんぞ相似たるの甚だしきと心私かにをかしく存候。

この畑打、畫にはなるべし、寫眞にはいかがかと思ひ止り、田を横ぎりて關口(三)の堤に出でんと、畦道づたひに參り候ふ際、西北の空に一

嫩雲

抹の嫩雲ありてものうげに懸り候ふが、甚だおもしろく覺え候ふ故、遙かの岡に遠樹のなづなの如くなるを添景として、この春雲を寫さんものと、或は縱に横に、或は右に左に、或は高く低く頻りに位置の工夫いたし候ふひまに、微風起りて、雲はいづれへか消失せ申候。かゝる例は、余が銃獵に於ても屢〻遭難せしところにござ候。去つて野水の橋を尋ね候ふ途に、二小兒の魚を汲むに遇ひ候へば、暫く立止り候ふところ、ざる持てる子の水底をかいさがすとて、眞向に小さき臀を聳し候ふがうれしきに、取敢へずこれを一照し、再びかのはんの木林の方を望み候へば、先のやうに宜しくは候はねど、また暖雲の緩く横たはりて眠れる如きが顯れ候ふ間、手早く寫し取り申候。憚ながら御安心下されたく候。

(一)不明。

(二)小石川區關口臺町椿山。

(二)芭蕉庵の下を過ぎて三四町參り候ふほどに、せり、嫁菜の路も興盡きたれば、抜道をもとめて高田の大通に出で、雜司ヶ谷までひとのしと進み候へど、一路の單調殆ど忍ぶべからず、ぶらぶらと引返し

て、(一)日本女子大學校の前に來り候。先年この校の教授戸川殘花氏(二)より、女生の割烹を饗せんとて招待いたされ候ふことこれあり候ひしに、をり惡しく胃病中にて參らず候ひしを、今日あたりその人に遇ひもせば、一碗の(三)コーヒーなどこそ欲しけれと門を過ぎて、まだ疎なるからたち垣に沿ひ行けば、遊歩場の木立の間に(四)ベンチを置き、梅の花の二木ばかり咲亂れたる下に、焦茶の袴穿きて年長けたる女生の、書見に餘念なきが目に入り申候。背景には白(五)ペンキの色鮮かに、校舍の建物木隱れて、花陰讀書は美人十題の目にも入るべきを、垣間見の速寫更に妙な

(一)小石川區高田豐川町。

(二)文章家。名は安宅。大正十三年歿。

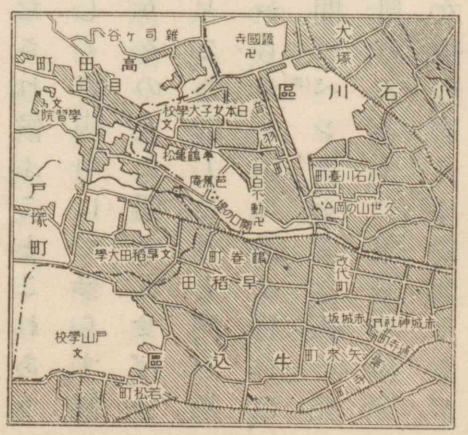
(三)Coffee.（枸橘）

(四)Bench.

(五)Paint.

らんと、佩びたるカメラを取りて、やをらひんだき、からたちの枝のひまより、とやせんかくやと心騷ぐ後は往來、何するかと人々の目を側めて寄らんとするに氣おくれ、匆々にここを立退き候ふは、なんとやらん昔物語にもあるやうにて、いとゆかしうこそ覺え候ひしか。

ここより家續き、行きかひ繁く相成り候へば、課題にかなふものあらんかなど思ひつゝ、(一)鶴亀松の邊近く參り候へば、前面より自轉車を驅り來り候ふ丁稚あがりの、あはやと見る間に、道なかに居睡りたる大猫のそびらに乘掛け、眞二つに敷伏せ候ふほどに、無慚にも仆るゝ車と右左に振落され候ふは、目覺しかりける粗相にこれあり候。この圖樣は誠に瞬間の



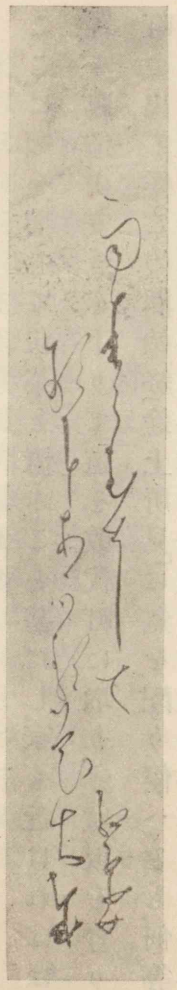
(一)小石川區高田老松町細川侯門前にあつた二本の老松。數年前枯れた。

そびら

變にして、小生の指のインスタント・ボタンに及ばざる中に起りかつ終り申候ふ次第にこれあり候。

やがて目白不動に着し、神木の下に憩ひ居候ふ時、鐘樓に人登りて三時を撞き申候。坂を下りて音羽町に出づれば、小石川臺町の盡くる所、久世山の岡高く面を壓して項上に扶疎たる老木を點し、樹下を着け候。

この岡は矢來町の盡頭より見通しの所に方りて、一風情あるたゝずまひと、常に見遣り候ふその麓に今恰も出でたれば、一たびは攀玩の興を取るべしと思ひ、幾ど壁立せる峻路をふむこととて、倦脚屢〻危かりしが、登りつむれば地濶く坦にして、二個所にローンテニ



尾崎紅葉筆蹟に両三の人影

(一)Instant Button

(二)(三)(四)(五)共に小石川區。

扶疎

雨來らむとして頻にあかる花火哉　紅葉

(六)牛込區。

攀玩

(七)Lawn Tennis.

けし人形
鳥瞰
指顧

ス塲あり、細草を藉きて暫く臨眺の眼を縱にすれば、輕風ゆるく來りて、澹雲とるべく、眼下のいらかは水有らざるに何の鱗ぞ。人馬の行くは誰が袖こぼれしけし人形かと、見馴れし景も鳥瞰的の新しく、傍なる崖際の木の根に三少年の指顧して立てるを、背面より竊に一照いたし候。

ここに烟を喫して後、茶を憶ふこと甚だし。家も近ければはや歸らんと、脇道の安きを下りて、道を改代町に取り、赤城坂を登りて通寺町に出で候。この間始終「途上所見」に氣を配り候へども、何等の得るところなく、うち疲れて家に入れば、家内出拂ひて浴に赴き、まづうれしきは、爐上の鐵瓶沸々として煮えたり。早速茶を入れんと獨りひしめかすをりから、岩代梁川なる松濤子の干柿を贈り來るに會ひ、直ちに包を開き、その一枚を喫して、濃綠の熱茶に嗽ぐ。快謂ふべからず。乃ちその勢に乘じ、無精の筆を驅りてこの文を綴り申候。撮影の結果、伎倆の巧拙、及び機械の精麁等は、近日參店の上、暗室中にて萬々貴意を得申すべく候也。草々以上。

三月四日[一]

春翠堂寫兄

(一)明治三十五年。

自修文

三二　蓑蟲と蜘蛛

吉村冬彦

二階の縁側の硝子戸のすぐ前に、大きな楓が空一杯に枝を擴げてゐる。その枝に澤山な蓑蟲がぶら下つてゐる。

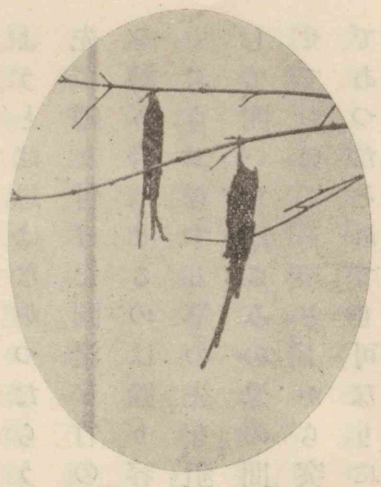
去年の夏中はこの蟲が盛に活動してゐた。いつも午頃になるとはひ出して、小枝の先の青葉をたぐり寄せては食つてゐた。身體の割に旺盛な彼等の食慾は、多數な小枝を坊主にしてしまふまでは、滿足されなかつた。紅葉が美しくなる頃には、もう活動はしなかつたやうである。とにかく私は日々に變つて行く葉の色

彩に注意を奪はれて、暫く蓑蟲の存在などは忘れてゐた。

しかし、紅葉がひからび縮れて、やがて散つてしまふと、裸になつた梢にぶら下つてゐる多數な蓑蟲が、急に目立つて來た。大きなのや、小さいのや、長い小枝を杖のやうに下げたのや、枯葉を一枚肩に羽織つたのや、いろいろさまざまな恰好をしたのが、明るい空に對して黑く浮出して見えた。それがその日その日の風に吹かれて搖いでゐた。

かよわい絲でつるされてゐるやうに見えるが、いかなる木枯にも決して吹落されないほど、しつかり取付いてゐるのであつた。緣側から、はうきの先などではね落さうとしたが、そんなことではなかなか落ちさうもなかつた。自分は冬中この死んでゐるか生きてゐるかもわからない蟲の外殼の、鈴生になつてゐるのを眺めて暮して來た。そして、自分自身の生活が、なんだかこの蟲のによく似てゐるやうな氣のする時もあつた。

春がやつて來た。今まで灰色や土色をしてゐたあらゆる落葉樹の梢には、いつとなしにぼうつと赤みがさして來た。鼻の先の例の楓の小枝の尖端も、一つ一つ膨みを帶びて來て、それがちやうどガーネット[1]のやうな光澤をして輝き始めた。私はそれがやがて若葉になる時のことを考へてゐるうちに、それまでにこの蓑蟲を驅除して置く必要を感じて來た。



蓑蟲

多分だめだらうとは思つたが、試に物干竿の長いのを持つて來て、たゝき落しはね落さうとしたが、やつぱり無効であつた。はねるたびにあの紡錘形の袋は、プロペラー[2]のやうに空中に輪をかいて廻轉するだけであつた。惡くすると、小枝を折り若芽を傷つけるばかりである。今度は

[1] Garnet. 柘榴石。深紅色

[2] Propeller（推進機）

小さいはさみを出して來て、竿の先に縛りつけた。それは數年前に流行した十幾通りの使方のあるといふ西洋ばさみである。自分は今その十幾種の外の、もう一つの使方をしようといふのであつた。はさみの發明者も、よもやこれが蓑蟲を取る爲に使はれようとは思はなかつたらう。はさみの先を半ば開いた形で、竿の先に縛り付けた。圓滑な竹の肌と、ニッケル(一)鍍金のはさみの柄とを縛り合はせるのは、餘り容易でなかつた。

ぶらぶらする竿の先を、狙を定めて蟲の方へ持つて行つた。そして、開いたはさみの刃の間に、蟲の袋の口に近い所をくひこませておいて、そつと下から突上げると、案外にうまくちぎれるのであつた。それでも可なりに強い抵抗の爲に、細長い竿は弓狀に曲ることもあつた。幸に枝を傷つけないで、袋だけをむしり取ることができたのである。

庭の楓のはあらかた取盡して、他の樹のも漁つて歩いた。結局

(一) Nickel.

數へて見たら、大小取交ぜて四十九個あつた。それを一遍庭の芝生の上にぶちまけて、並べて見た。

一つ一つ蟲の外殼には、やはりそれぞれの個性があつた。割に大きく長い枯枝の片を並べたのが大多數であるが、中には殆ど目立つほどの枝片は附けないで、澁紙のやうな肌をしてゐるのもあつた。えにしだの豆の莢をうまくつなぎ合はせてゐるのもあつて、これがのそのそはつて歩いてゐた時の滑稽な樣子が、自ら想像された。

就中大きなのを選んで袋を切開き、蟲がどうなつてゐるかを見たいと思つた。竿の先のはさみを外して、袋の両端から少しづつ蟲を傷つけないやうに注意しながら切つて行つた。袋の纖維はなかなか強靱であるので、鈍いはさみの刃は屢〻切損じて、上滑りをした。やつと取出した蟲は、可なり大きなものであつた。紫黑色の肌がはち切れさうに肥つてゐて、大きな貪慾さうな嘴は、褐

（金雀枝）

ものうけ　だるさうに。大儀さうに。

舍利　死んでかたくなつたもの。

(一)Percent. 百に對する比例。百分比。

色に光つてゐた。袋の暗闇から急に強烈な春の日光に照らされて、蟲のからだにどんな變化が起つてゐるか、それは人間には想像もつかないが、なんだか醉つてでもゐるやうに、或はまだ永い眠が覺めきらないやうに、ものうげに八對の足を動かしてゐた。芝生の上に置いて、もとの古巢の空殼を頭の所におつつけてやつても、最早それを忘れてしまつたのか、はひこむだけの力がないのか、もうそれきり身體を動かさないで、じつとしてゐた。

もう一つのを開いて見ると、それは身體の下半がひすばつて、舍利になつてゐた。蠶にあるやうな病菌が、やはりこの蟲の世界にも入りこんで、自然の制裁を行つてゐるのかと想像された。しかし、蓑蟲の恐しい敵はまだ外にあつた。

澤山な袋を外からつまんで見てゐるうちに、中空で蟲の御留守になつてゐるのが、可なり多くのパーセント(一)を占めてゐるのに氣が付いた。よく見てゐると、そのやうなのに限つて、袋の横腹

(一)Millimetre. 一メートル(ぜ)の千分の一。

(滓)

壙穴　はかあな。

に直徑一ミリメートル(一)かそこらの小さい孔のあることを發見した。變だと思つて、はさみでその一つを切破つて行く中に、袋の中から思ひがけなく小さい蜘蛛が一疋飛出して來て、あわたゞしくどこかへ逃去つた。ちらりと見ただけであるが、それは薄い紫色をした、かはいらしい小蜘蛛であつた。

この意外な空巢の占有者を見た時に、私の頭に一つの恐しい考が、電光のやうに閃いた。それで急いで袋を縱に切開いて見ると、果して袋の底にかすのやうになつた蓑蟲の遺骸の片々が殘つてゐた。あの肥大な蟲の汁氣といふ汁氣は、悉く吸盡され嘗盡されて、たゞ一つまみの灰のやうなものしか殘つてゐなかつた。たゞあの堅い褐色の嘴だけは、そのまゝの形を留めてゐた。それはなんだか、かぶとの鉢のやうな恰好にも見られた。灰色の壙穴の底に朽殘つた戰衣の屑といつたやうな氣もした。

この恐しい敵は、蓑蟲の難攻不落と賴む外郭の壁上を、忍足で

殺戮　ころすこと。

一分だめし　わづかづつにきりさいなまれる。

はひあるくに相違ない。そして、僅かな弱點を搜しあてて、そこに鋭い毒牙を働かせ始める。壁がやがて破れたと思ふと、もう蓑蟲の脇腹に一滴の毒液が注射されるのであらう。

人間ならば來年の夏の青葉の夢でも見ながら、安樂な眠に包まれてゐる最中に、突然脇腹を食破る狼の牙を感ずるやうなものである。これを拂ひ除ける爲には、蓑蟲の足は全く無能である。唯一の武器とする嘴を使はうとすると、餘りに窮屈な自分の家は、身體を曲げることを許さない。最期の苦惱にもがくだけの餘裕さへもない。生物の間に行はれる殺戮の中でも、これは恐らく最も殘酷なものの一つに相違ない。全く無抵抗な狀態に於て、そして苦痛を表現することすら許されないで、一分だめしに殺されるのである。

蟲の肥大な身體は、その十分の一にも足りない小さい蜘蛛の腹の中に消えてしまつてゐる。殘つたものは僅かな外皮の屑と、

調節　つりあひをとること。

自負心　うぬぼれ心。

据膳　すぐたべられるやうにしてそなへたお膳。

飽食　腹一ぱいたべること。

そして、依然として小さい蜘蛛一疋の「生命」とである。差引した殘の「物質」は、どうなつたかわからない。

蓑蟲が繁殖しようとする所には、自らこの蜘蛛が繁殖して、そこに自然の調節が行はれてゐるのであつた。私が蓑蟲を驅除しなければ、今に楓の葉は食盡されるだらうと思つたのは、餘りに淺はかな人間の自負心であつた。寧ろたゞそのまゝにもう少し放置して、自然の機巧を傍觀した方が、よかつたやうに思はれて來たのである。蓑蟲にはどうすることもできないこの蜘蛛にも、また相當な敵があるに相違ない。「昆蟲の生活」といふ書物を讀んだ時に、地蜂の或ものが蜘蛛を攻擊して、その毒針を正確に蜘蛛の胸の一局部に刺通して、これを痲痺させるといふ記事があつた。痲痺した蜘蛛の脇腹に、蜂は一つの卵を產みつけて行く。卵から出た幼蟲は、親の据膳をして置いてくれた佳肴を、貪り食つて生長する。十分飽食して眠つてゐる間に、幼蟲の單純な身體に複

雜な變化が起つて、今度眼を覺すと、もう一人前の蜂になつてゐるといふのである。

或蜘蛛が、或蛾の幼蟲であるところの蓑蟲の胸に食ひついてゐる一方では、蓑蟲のやうな形をした或蜂の幼蟲が、他の蜘蛛の腹をしやぶつてゐる。このやうな鬪爭殺戮の世界が、美しい花園や庭の木立の間に行はれてゐるのである。人間が國際聯盟の夢を見てゐる間に。

或學者の說によると、動物界が進化の途中で二派に分れ、一方は外皮に硬いキチン質(一)を具へた昆蟲になり、その最も進步したものが蜂や蟻である。また他の分派は中心に硬い脊骨ができて、その一番發展したものが人間だといふことである。私にはこの說がどれだけほんたうだかわからない。しかし、いづれにしても、昆蟲の世界に行はれると同じやうな鬪爭の魂が、あらゆる有脊椎動物を傳はつて來て、最後の人間にいたつて、どんな具合に進

國際聯盟云々　最近の世界大戰後、各國間に國際聯盟が結ばれて、互に戰爭をすることを防止しようとつた。それでは人間はもはや世の中には戰爭は起るまいと、平和の夢を見てゐる間に、美しい花園の中では殘忍な戰が行はれてゐる。

(一) Chitin. 節足動物の甲殼をつくつてゐる角質。

化して來たかをつくづく考へて見ると、つまりは私たちの先祖が、蓑蟲や蜘蛛の先祖と同じであつてもいいやうな氣がしてくる。

四十九個の紡錘體の仕末に困つたが、結局花畑の隅の土を深く掘つて、その奧に埋めてしまつた。その中の幾パーセントには、きつと蜘蛛がはいつてゐたに相違ない。かうして私の庭での蓑蟲と蜘蛛との歷史は、一段落に達したわけである。

しかし、これだけでは、この歷史は濟みさうにも思はれない。私は少からざる興味と期待とをもつて、今年の夏を待受けてゐる。

——冬彥集——

三三　曉の誕生

島崎藤村

東の空のほのぼのと、
汝が世は白みそめにけり、
この曉のさまを見て、
運命をいかに占はん。

ことにさやけき紅の
やがて處女となるまでの
朝風舞をまふごとく、
鷄は寢覺に驚きて、
始めて朝の床の上に、
つぼみを破るあけぼのの
ぬるき潮に浴して、
まだ罪もなき姿こそ、

ひかりを放つ明星や、
汝が生先のしるべせよ。
遥かに雲の袖を吹き、
まづ黎明を呼びにけり。
汝が初聲を聞く時は、
蓮の花にまがふかな。
朝日ににほふあかね染、
なかばは夢の風情なれ。

いかにいかなる世なりとは、思ふ心もなからまし。
そのうるはしき眼もて、なにをか見んと願ふらん。
まだ生まれ來し世の中に、願ふもとめもなからまし。
空に優しき手をのべて、なにをか早も慕ふらん。
行く末花と生ひたちて、いかなる夢を重ぬとも、
かゝるゆたけき朝のごと、心の空のしづかなれ。

——藤村詩集——

三四　春と人

上田　敏

生命の中流に棹さして十分に世の苦樂を味はひ、自己の意識を強めようとするものは、草木の角ぐみわたる春の日を浴びて、失は

れた力のとみに復歸するを感じ、新しい熱意を以て諸の印象を迎へる。郊外にも、都會にも、自然の風色に、人事の活動に、春光と生氣とが漲りわたるのだから、彼岸から八重までの櫻時ばかりでなく、ぼけも、海棠も、薔薇も、菫も、蓮華、たんぽゝも、垣根の若葉も、鳥の聲も濃やかに懷かしゝ、しとしとと降る春の雨、花見歸の土手の上、上潮と共に春愁をもたらす夕暮の風、さまざまな夢思はせる靜寂な池の汀に菖蒲咲く頃も過ぎて、瑠璃色めいた碧空に、白い雲がふわふわと動いて行く春と夏との界までも、すべての景物は多感な人に迫つて來て、快くも亂心地ならしめる。世人動もすれば因襲に囚はれて、睦月、衣更着、彌生の三月を春とし、櫻花の散るのを見て季すでに過ぎたとするものもあるが、それは眞に春の心を解したものでない。春は淺いもよく、盛もよく、たけなはなるもよい。

春はたゞ人の心を浮立たせて、氣輕な戯に赴かしめるのではな

春愁

(蘭)

官能

靜觀

い。この時うるはしい萬物は、生の惱を感じて、精力の横溢に壓迫されれる。そこに創作の苦痛がある。芽ばへ花咲くことは一種の緩和であつて、いはば重荷を下した時の安心に過ぎぬ。されば、この春色に對する人間の心も、萬物の活動に同

上田敏

情し共鳴して、ここに平行した變化を感じ、偉大にして深沈たる大自然の節奏に合するのである。若し花を看てたゞ單純な官能の快感を貪るのみならば、同じ色の造花を見てもよいはずであるが、天然の千紫萬紅には、それ以上の深い意味が自ら籠つてゐて、思邪なき靜觀の人心に通ずる。舊くしてしかも常に新しい春のめぐり來て、吾等の今更に胸さわぎするのは、この大自然の脈搏を感ずるからである。爽快な夏もおもしろく、靜閑にして

雷同

豐かな秋も樂しく、寂としてまた自ら人に勇あらしめる冬も佳いが、自然の胸を抱く春の心は、年毎に變りなく切である。

誰いひそめた言葉であらうか、イタリーの古歌に、「春は一年の若き時、若き時は一生の春。」とある。春を愛するは若きを愛するのだ。春を惜しむのは青年の去易きを惜しむのだ。生と、死と、美と、悅と、愁と、愛とを歌ふ古今の抒情詩には、老と若さとの對照がいつも伴奏をつけてゐる。あゝ、少年にして智あらば、老年にして力あらばと、繰返し繰返し歌ひ續ける古の智慧を聽く毎に、春と少年とのあわたゞしく過行くのが惜しくて堪らぬ。「けふをつかめ。」とローマの詩人は敎へ、「手折れよ薔薇を、花咲くひまにけふがあすある世でもなし。」とドイツの詩にもいふ。この一見していかにも無分別な料簡は、尋常の道學者や、考もなく口先でこれに雷同する俗流の思ふほどしかく思慮のない說ではない。智と力といづれか尊い。よしや智淺くと

老來

も、生命の水は汲みえられる。力なくては泉の傍へも近寄れまい。初は淺かつた智も、苦樂の經驗に依つて、終に自らを深くする例はあるが、年少にしてその世の春にふさはしい思と行とがなく、徒に老成を期して空しく貴重な光陰を費すのは、怯に非ずんば鈍である。この類の人、偶〻老いこし方を顧て一代の好機會を逸したのを悔む時、口にこそ出さないが、心中はさぞ殘念なことであらう。

春の光の波に浮かんで、暢やかに朗かに生を樂しめ。「時」が食みへらす人間の力も、萬物の復活に交感して補はれて行く。しかもまた春の樂みには、愁もあり、悅もあり、惱もあつて、それが吾等の生活力を刺戟し、促進する。かくて晩春の候、膚滑かに筋も弛んで、稍倦怠を感ずるのは、勢力過剩の爲であらうか。續いてくる夏秋の努力に具へる準備とも思へる。年毎の春の光を身に浴びて、心の奥まで浸つて居れば、老はおのづと退散する。人若し熱情を以て春を追求した

なら、その追求の間に自然と力は加り、老はせきとめられよう。

春の惠を輕んずるのは大の料簡違である。天の與ふるを取らないと罰が當る。尤も一年中の氣候が餘り温暖であつて、凛烈な冬の寒氣と寂莫とを痛切に感じない時は、勿體なくも春の有難味を忘れ易くなる場合がある。例へば、日本の太平洋岸、殊に東海道及びそれより西南部に住まふ人々の中には、また春が來たかくらゐの微温な感じを抱くものもあらう。しかし、それでは實にせつかくの樂しい世界を自分で狹くするのである。對照は眞にものの味を強めるもので、白雪の冬よりして直ちに陽春の盛光に接すると、眼も眩むばかりの美に打たれることがある。往年私は歐洲觀光の途すがら、スキスから嶺南清明の天地に移らうとした時、聖ゴタール[一]のトンネルに入る前までは、連山湖面悉く飛雪に蔽はれて、冷たい白い夢の中を通る心持であつたが、汽車が暫く暗黑道を過ぎて、忽ち青

(一) St. Gothard. スキス中央部に連なるアルプス山脈のトンネル。長さ九哩餘。

天の白光に接するや、思はず聲を揚げて、南歐の讃美を唱へた。アイロロ[一]といふ里にかゝつた頃、南の方遙かにイタリーの平原が黃金の光に浮かんで、なごのわたりかと思ふばかりなのを望んだ時、つくづく春の德を思つた。

若い美しい娘が餘りに手を大事にしてゐるのを見て、或人が「どうせ終には萎びてしまふ手ではないか。」と、たしなめるつもりでいつた時、或夫人は口を挿んでいつた、「しかし、今はまだ萎びてゐない。」と。人生に對する最も賢明な態度は、この一言に含まれてゐる。樂しい日に樂しめ。悲しみたければ悲しい日が來てからにするがよい。その時も若しできるなら、自分の悲みをもつて近くの人々に氣持わるがらせずに濟ませたいものだ。傳道の士がいつた如く、すべてに時がある。播く時もある。收穫する時もある。樂しむ時もある。悲しむ時もある。そして、春の日は樂しむ時である。躊躇なく、心配なく、取

(一) Airolo. 聖ゴタールのトンネルの南口。

越苦勞なく、暢びやかに、朗かに春の生を樂しめ。——思想問題——

三五　春をうたふ

山内一郎

○

春である。自然は今、寒冷と嚴酷と沈欝との世界から解放たれて、潑剌たる復活の生氣にゆらめいてゐる。そこには永い間の眠から醒めた新生の歡喜が充ち溢れてゐる。

○

我々の民族に與へられた「秋」は、嚴肅な姿をもつて我々に迫つてくる。我々の心は水のやうな秋風を前にして、自らひきしまるのを感ずる。そこには春のそれのやうな一種の若々しい騷々しさと、人の心をそゝるやうな柔かな哀愁とがない。森然と澄みわたる大氣。深い紺青の空。人間の心は著しく省察的になり、内へ内へと食ひこ

省察的

本能

んでくる。悲みも、痛みも、鋭く人の心を打つ。

○

秋はいふまでもなく思索の世界である。人はその深淺の差はあつても、自ら自然の姿と共に、知らず識らず沈靜の世界に送りこまれる。大づかみのいひ方ではあるが、社會の各層にわたつて、春に見るやうな人間の衝動的な本能に關する事件の少い事實が、一切を物語るのである。

○

それに比べると、春の色彩は一切が開放的であり、衝動的である。靜かな理性の世界ではなくて、奔放自在な感情の世界である。それは無限な情熱と清新な生命との躍動の世界である。限りない生命の流がそこにある。

○

春は正しく人間の青年期である。潑剌たる新生の歡喜に、彼等は心躍り魂ゆらぐ思があるであらう。殊に三月、學窓から放たれる年少學徒の群が、社會の生活群の一人として送り出されて立上る時の若い靈魂の戰きは、我々も知る。今なほきのふの如き感新たなるものがある。

○

しかしながら、人は容易く社會に老成する。社會は複雜であつて、同時に單純である。それは恰も自然現象の春去り、夏逝き、秋至るやうなものである。やがて生活に對する熱火の愛が失はれる。血のにじみ出るやうな切實な人生に對する感激が消果てる。自分自身に對する情熱すら、跡なく燃えつくされる。若き老人のいかに社會の各層にうごめいてゐることであるよ。

○

消極の人生

社會はかくして沈滯の底に落ちこんだ。そして、現代の社會の各層を掩ふ醜惡と憂鬱とがそこに醱酵した。清新と情熱とが失はれた所に、何があり、何が殘るであらうか。それは恐らく生命なき死灰の姿である。冷靜な思索の世界は消極の人生である。情熱を以て思索し得ない一切の問題をうち棄て得るものにのみ、そこにほんたうの潑剌たる青春の世界がうち開かれるであらう。

○

青春の世界には矛盾があるが、そこには虛飾がない。衝動の世界であるが故である。彼等は疑惑と確信との矛盾の上に立つてゐる。彼等の前には永久不變の文字がない。眞理は誰が果してそれを證明し得ようか。恐らくそれは閉された牢獄の裡にのみ發見さるべきである。そして、それは彼等に取つてなんのかゝはりもないものである。一切は動の世界の上に立つ。それが青春の疑惑であり、確信

である。

○

今は春、若人の春である。せめては彼等に合はせて新生の歡喜を心ゆくばかり歌ふべきである。腐敗と沈滯との底に陷ちてゐるやうな現代の社會に清新の氣を注ぐものは、潑剌たる青春の合唱より外にはない。

改訂 女子新國文 卷八 終

大正十二年十二月十五日　訂正再版發行
大正十五年九月二十八日　訂正三版發行
昭和元年十二月二十五日　訂正四版印刷
昭和元年十二月二十七日　訂正四版發行

改訂 女子新國文 奥附

編者　芳賀矢一
發行者　合資會社 冨山房
代表者　坂本嘉治馬
印刷者　冨山房印刷部

定價
自至 卷卷 一四　各金四拾貳錢
自至 卷卷 五八　各金四拾錢
昭和三年度臨時定價
自至 卷卷 一四　各金七拾錢
自至 卷卷 五八　各金六拾六錢

檢印 浦野製
著作權所有

發行所　東京市神田區通神保町九番地
合資會社 冨山房
電話神田 二四一・二四二・二四三番
振替口座東京五〇一番

貼り方

一 表布は裏の寸法より二分位大に裁つ裏布と接合せ裏に色紙を貼り次に型に固のねくとめしをなして貼り五の色紙を貼り四隅に型紙に沿ひ裏にそれぞれ固のねくとめ鏡の裏の所を折り返して貼り

彼岸の七の色紙を貼りそれ以外をつくり井を貼る

二 表裏の縫代を含めて縫の表に色紙貼りをへ小型の縫代七分の所に貼る

それ別に貼る 深い所 時は五に貼る 型をなし折りをつけて貼る

四型に貼るを入れ周囲に表引をなして貼る 型の縫の表に型の縫を合せて

八つの所まで三方を貼る 一分の位置を入れて置く

に固めに八枚を入れて置く

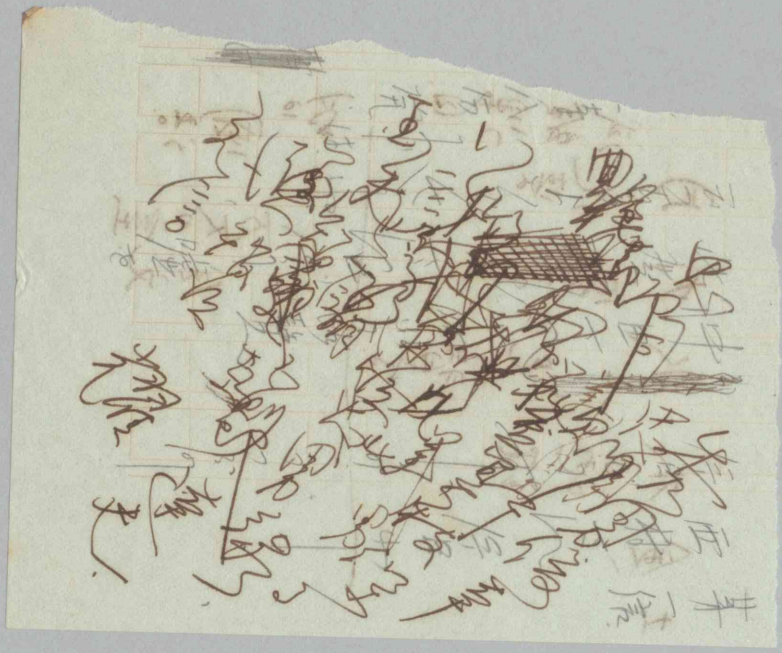
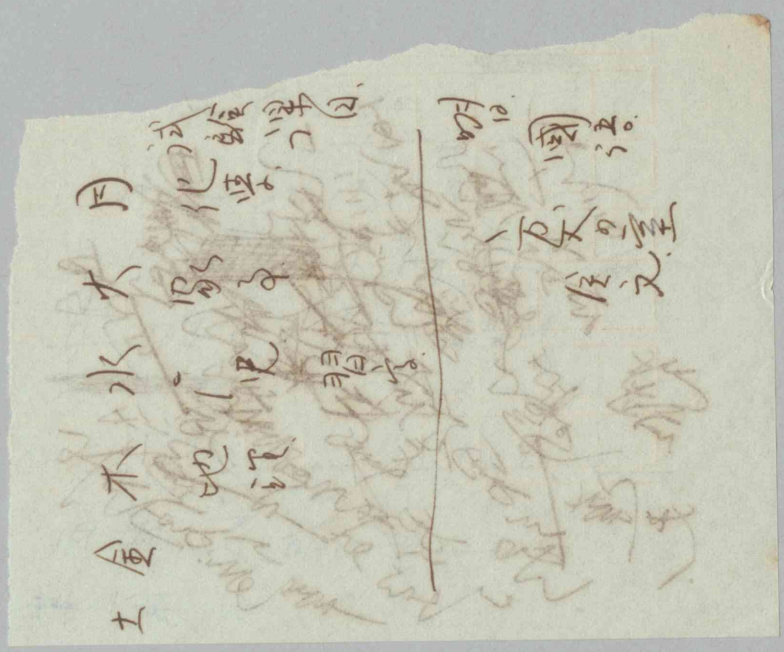
三 鏡の裏の周囲にのりを付け貼るは貼り密の所に重ねこの部は絶縁は前表に

両側も先引をなして貼る 政に縫代を貼り切れ付きを

鏡のうに合せて貼り八枚入れ政に閉じ

び八つの所を閉じて置く 閉じ前の表裏を貼り合す 閉じ方

安藝國女

第四學年

西村美智江